

令和6年度

畜産総合センター
業 務 報 告 書

令和7年7月



目次

I 総説	1
II 組織及び職員	5
III 予算及び収入状況	6
IV 業務	7
本場	7
種畜部	7
酪農課	7
乳牛関係	7
検定関係	17
飼料関係	19
養豚課	24
技術部	29
人工妊娠課	29
人工妊娠関係	29
研修指導関係	36
和牛改良課	38
段戸山牧場	43
段戸山牧場の概要	43
育成課	46
草地課	50
種鶏場	59
種鶏場の概要	59

種鶏課	59
生産課	64
移転整備	67
種鶏場のあゆみ	68
V 業績発表等	72

I 総説

1 沿革

【本場】

大正	12年	10月	農商務省種馬所（岡崎市美合町）の用地の交付を受け、愛知県種畜場として業務を開始。
昭和	24年	4月	岡崎市丸山町に移転。
	28年	7月	春日井市において尾張分場が業務を開始。
	29年	4月	三河高原牧場（東加茂郡下山村）発足。
	36年	4月	肉畜試験場の設置により尾張分場の事業を移管。
	44年	4月	三河高原牧場の廃止、その事業を継承（大林牧野）。
	45年	4月	種畜場の名称を種畜センターに変更。
	60年	4月	畜産総合センター基本構想検討会設置。
	62年	4月	畜産総合センター整備工事着手。
平成	3年	4月	機構改革により種畜センター、段戸山牧場、種鶏センターを組織統合し、畜産総合センターを設置。
	7～	9年度	大林牧野整備工事实施。
	11年	4月	愛知県牧野条例の廃止に伴い大林牧野の名称を廃止し、施設名称を三河高原牧場に変更。
	22年	4月	酪農肉牛課を酪農課と肉牛課に組織再編。
	24年	4月	組織機構の見直しで技術指導部を技術部とし、種畜部の肉牛課を和牛改良課と改称し技術部に組織再編。
令和	2～	3年度	豚舎の場内移転、再整備。

【段戸山牧場】

昭和	44年	4月	奥三河地区県営草地開発事業により乳用牛育成牧場の中核として設置。 昭和28年創立の山岳種畜育成場を段戸山牧場茶臼山牧野として併設し、35年から実施していた乳用牛預託放牧育成事業を継承
	50年	3月	茶臼山牧野での乳用牛預託放牧育成事業中止、以降、段戸山牧場場有育成牛の放牧利用
	53～	55年度	畜産経営環境整備事業による草地及び飼料畑の造成、肥培かんがい施設等の場内整備
平成	3年	4月	畜産総合センターに組織統合
	11年	4月	愛知県牧野条例の廃止に伴い茶臼山牧野の名称を廃止し、施設名称を茶臼山高原牧場に変更
	18年	3月	都道府県営公共牧場整備事業による施設等の再整備完了

【種鶏場】

昭和	12年	種鶏場が安城市篠目町に設立（種畜場清洲分場は種鶏場清洲分場となる）。
	24年	種鶏場清洲分場は養鶏試験場として独立。
	39年	3か年計画で飼養羽数3,720羽を10,000羽の施設に拡充整備。
	43年 4月	農業総合試験場養鶏研究所の発足に伴い系統造成部門を移管し、種鶏場は既成系統の維持増殖業を実施。
	45年 4月	種鶏センターに改称。
平成	3年 4月	畜産総合センターに組織統合。
令和	5年 4月	小牧市大草に移転。

2 所在地

名 称	所 在 地	郵便番号	電 話 番 号
畜産総合センター本場	岡崎市丸山町字亀山9-1	444-0006	(0564)21-0201 FAX (0564)22-1857
〃 三河高原牧場	豊田市東大林町半の木3-39	444-3261	(0565)90-3504 FAX (0565)90-3524
〃 段戸山牧場	豊田市小田木町タカドヤ1-2	441-2525	(0565)82-2252 FAX (0565)82-2519
〃 茶白山高原牧場	北設楽郡豊根村坂宇場字御所平70-178	449-0405	(0536)87-2004
〃 種 鶏 場	小牧市大字大草字年上坂5818-1	485-0802	(0568)39-6206 FAX (0568)39-6207

3 用地及び主要な建物

区 分	用 地 (㎡)	建 物 (㎡)	備 考
本 場	383,993.37	14,412.73	
美合農場	38,041.08	-	
三河高原牧場	258,310.00	2,266.82	借地
段戸山牧場	1,617,336.00	11,112.01	
茶白山高原牧場	602,161.00	461.86	
種 鶏 場	42,652.00	10,066.20	

(1) 用地（用途別面積）

(本 場)

(ha)

用途	地区			計
	本 場	美合農場	三河高原牧場	
施 設 地	3.2	-	0.3	3.5
飼 料 畑	6.2	2.5	-	8.7
草 地	-	-	20.0	20.0
そ の 他	28.9	1.3	5.5	35.7
計	38.3	3.8	25.8	67.9

(段戸山牧場)

(ha)

用途	地区	段戸山牧場	茶臼山高原牧場	計
施設地		2.1	-	2.1
飼料畑		22.8	-	22.8
採草地		11.7	-	11.7
放牧地		75.7	46.3	122.0
山林等		49.4	13.9	63.3
計		161.7	60.2	221.9

(種鶏場)

(ha)

用途	種鶏場	計
施設地	4.2	4.2

(2) 主要な建物

場別 項目	本場		段戸山牧場		種鶏場	
	棟数	面積 (㎡)	棟数	面積 (㎡)	棟数	面積 (㎡)
管理棟	1	849.62	1	165.25	1	539.68
多目的催事施設	1	1,299.50				
家畜小屋	1	53.11				
研修館	1	534.53				
検査棟	2	338.85				
牛舎	1	3,534.95	5	66,164.56		
隔離牛舎	1	150.04	1	158.30		
豚舎管理棟	1	172.50				
隔離豚舎	1	106.84				
検定豚舎	1	924.06				
育成豚舎	1	1,130.91				
分娩離乳舎	1	922.51				
種豚舎	1	905.46				
車両農機具庫	3	809.26				
堆肥舎	3	620.91	1	1,800.00		
サイロ	7	800.00				
飼料機具庫	1	303.30				
旧寄宿舎	1	280.25				

場 別	本 場		段 戸 山 牧 場		種 鶏 場	
項目 名称	棟数	面積 (㎡)	棟数	面積 (㎡)	棟数	面積 (㎡)
管理棟 (三河高原牧場)	1	150.53				
牛舎 (三河高原牧場)	1	1,702.45				
堆肥舎 (三河高原牧場)	1	203.41				
育成牛舎 (三河高原牧場)	1	134.15				
家畜小屋 (三河高原牧場)	1	49.50				
畜ふん乾燥施設	1	767.60				
会議棟			1	237.33		
避難舎棟			4	660.00		
車庫・倉庫			8	1,209.45		
公舎			4(12戸)	729.12		
看視舎			5	262.35		
避難舎棟 (茶臼山高原牧場)			1	262.95		
農機具庫 (茶臼山高原牧場)			1	80.10		
看視舎 (茶臼山高原牧場)			1	37.26		
現場管理棟					1	334.80
管理棟					1	320.00
孵卵舎					1	425.00
幼雛鶏舎					1	254.12
育成鶏舎					1	1,554.78
成鶏舎					2	6,428.82
堆肥舎					1	483.00

II 組織及び職員

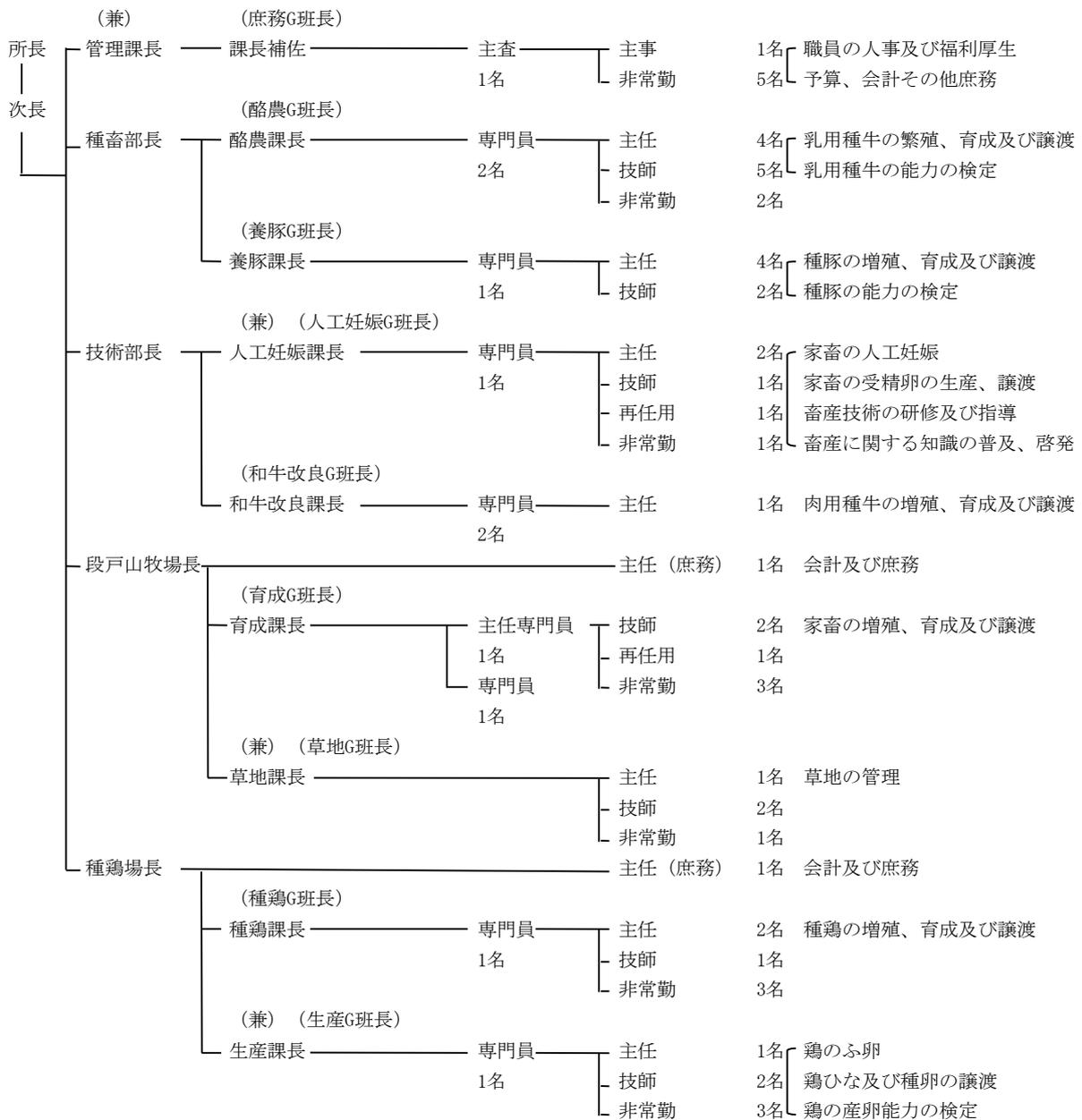
令和7年5月1日現在

1 組織及び事務分掌

職員数 56名 (常勤再任用を含む)	— 本場	35名
	— 段戸山牧場	10名
	— 種鶏場	11名

再任用 2名 (短時間)	— 本場	1名
	— 段戸山牧場	1名

非常勤 18名	— 本場	8名
	— 段戸山牧場	4名
	— 種鶏場	6名



Ⅲ 予算及び収入状況（令和6年度）

1 予算一覧

区 分	職 員 数			運 営 費	業 務 費	牛受精卵 供給事業費	種 鶏 場 整 備 費	計
	正 規	再任用	非常勤					
本 場	35	3	6	28,272	202,910	8,821	-	240,003
段戸山牧場	10	2	3	6,090	144,864	-	-	150,954
種 鶏 場	11	0	6	16,859	74,970	-	553,725	645,554
計	56	5	15	51,221	422,744	8,821	553,725	1,036,511

（注1）業務費には、牛受精卵移植実用化促進事業費 338千円、飼料増加分 49,195千円、施設設備整備費 31,789千円、優良乳用牛受精卵購入費 3,234千円を含む。

区 分	財 源 区 分						計
	国 庫	財産収入	諸収入	手数料	県 債	一般財源	
本 場	-	162,411	867	1,582	4,000	71,143	240,003
段戸山牧場	-	119,240	-	-	24,000	7,714	150,954
種 鶏 場	-	39,906	-	-	496,000	109,648	645,554
計	-	321,557	867	1,582	524,000	188,505	1,036,511

2 収入状況（生産物売払収入）

事 業 名		予 算 額	決 算 額	差 引	備 考
業 務 費	種豚管理費	67,341	74,163	6,822	本 場
	酪農管理費	66,054	74,821	8,767	〃
	肉用種牛管理費	21,756	12,850	△8,906	〃
	段戸山牧場業務費	119,240	114,723	△4,517	段戸山
	種鶏場業務費	39,906	38,911	△995	種鶏場
	小 計	314,297	315,468	1,171	
牛受精卵供給事業費		7,260	6,785	△475	本 場
計		321,557	322,253	696	

IV 業務 本 場

種 畜 部

酪 農 課

乳牛関係

1 業務の概要

平成3年度から10年度までは、北米から導入した優良乳用供卵牛を活用し、平成14年度からは、北米トップクラスの乳牛受精卵を毎年10卵程度購入して牛群整備を行い、受精卵移植等により生産された優良な種雌牛や受精卵を県内の酪農家に譲渡している。

さらに、県内の酪農家の飼養管理や乳質改善のための指導巡回及び各地区乳牛共進会等に協力して酪農振興に努めている。

2 業務の実績

(1) けい養牛及び譲渡実績

けい養牛頭数は、令和7年3月末現在104頭であり、輸入受精卵により誕生した雌牛23頭に加え、その娘牛36頭が含まれている。内訳は、経産牛52頭（うち輸入受精卵産13頭）・育成牛及び子牛52頭（うち輸入受精卵産子10頭）からなる。

令和6年度は13頭の育成牛を譲渡した（表1）。受精卵についても20卵譲渡した（表2）。

表1 譲渡牛概要

譲渡牛1	名 号	アイ ラブ ソデー ダーウィン リーブ ET		
	生年月日	R6. 2. 29	譲渡先	田原市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の子
譲渡牛2	名 号	アイ アルミア チーフ ミネラ		
	生年月日	R6. 3. 27	譲渡先	西尾市
	ステージ	育成牛	備 考	-
譲渡牛3	名 号	アイ グレー デルタラムダ [®] ハイ		
	生年月日	R6. 3. 29	譲渡先	豊橋市
	ステージ	育成牛	備 考	-
譲渡牛4	名 号	アイ ファンジ [®] デルタラムダ [®] クラ		
	生年月日	R6. 4. 3	譲渡先	豊田市
	ステージ	育成牛	備 考	-
譲渡牛5	名 号	アイ フイツン [®] デルプロ マーカ ET		
	生年月日	R6. 5. 16	譲渡先	半田市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の孫

譲渡牛 6	名 号	アイ ワルツ チーフ クス ET		
	生年月日	R6. 7. 13	譲渡先	豊川市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の子
譲渡牛 7	名 号	アイ ガーベラ リバー エンジュ ET		
	生年月日	R6. 8. 12	譲渡先	豊橋市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の孫
譲渡牛 8	名 号	アイ テーツ マロン モンブラン ET		
	生年月日	R6. 9. 26	譲渡先	田原市
	ステージ	育成牛	備 考	-
譲渡牛 9	名 号	アイ ブルミスト パーフェクト シイタケ		
	生年月日	R6. 11. 4	譲渡先	田原市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の孫
譲渡牛 10	名 号	アイ ブツシュトノエル ソニーP オリーブ ET		
	生年月日	R6. 11. 6	譲渡先	豊橋市
	ステージ	育成牛	備 考	-
譲渡牛 11	名 号	アイ ブツシュトノエル ソニーP ルカ ET		
	生年月日	R6. 11. 12	譲渡先	西尾市
	ステージ	育成牛	備 考	-
譲渡牛 12	名 号	アイ リー ジェリルイス テニス ET		
	生年月日	R6. 12. 10	譲渡先	西尾市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の孫
譲渡牛 13	名 号	アイ トロー ハズィットオール ササンカ ET		
	生年月日	R6. 12. 17	譲渡先	豊橋市
	ステージ	育成牛	備 考	輸入受精卵産子の子

表 2 譲渡受精卵概要

供卵牛	名号	交配種雄牛	卵数	譲渡市町
462	アイ スプライ プラネット ランブラン	キャプテンベインク	2	田原市
575	アイ ブルツク アルタ5G ラツセル ET	マロン	2	豊川市
590	アイ ソフィー アレックス グレー ET	デルタラムダ	2	田原市
696	アイ ロトP ナイトスカイ バラート ET	トゥルーパー	2	田原市
696	アイ ロトP ナイトスカイ バラート ET	トゥルーパー	2	新城市
752	アイ トロー パーデアヘニュー サンフラー	ダンテ	2	豊田市
770	アイ フーガ RF リー 1 フタコ	ジェリルイス	2	豊橋市
807	アイ マーシー フラスルト アンタシテ ET	リバー	2	田原市
860	アイ アストリト アルタケブロー プレリュート ET	ドラマロール	2	田原市
873	アイ カプアス トゥルーパー ホポー	ウツテイ	2	田原市

(2) 種雌牛繁殖成績

令和6年度の子牛生産頭数は、合計45頭（雌41、雄4）であった。うち輸入受精卵産子の生産は6頭（雌6）であった。

(3) 生乳生産量

出荷乳量は445,667kgであり、平均無脂固形分率9.02%、平均乳脂率4.24%、平均乳蛋白質率3.49%であった。

なお、平均販売乳価は151円（消費税込み、較差金・乳質評価含む）であった。

(4) 酪農指導業務

例年、酪農振興を目的に愛知県酪農農業協同組合等と連携をとりながら、各地区共進会への協力を行った。新型コロナウイルス感染症対応のため、飼養管理や乳質改善のための巡回指導は中止となった。

3 日常業務

(1) 乳牛の飼養管理

ア 搾乳

搾乳は原則として午前6時30分と午後4時の2回で、パイプラインミルクカーを使って行い、定期的に乳量を計測した。

なお、衛生的な生乳を生産するため、使い捨て搾乳用グローブ、アダー・ペーパー、搾乳用タオルを使用し、プレ及びポストディッピングの実施等、正しい搾乳手順で行った。

イ 分娩

乾乳時に寄生虫の駆除と乾乳用軟膏の投与、分娩予定2週間前にビタミン剤の投与を実施した。予定日が近づいた牛は産房に移動し、分娩徴候の観察を行った。分娩直後には、ビタミン剤、カルシウム剤、みそ等を投与した。

分娩後の子牛には、初乳製剤を投与したのち、低温殺菌に加え凍結処理した初乳を給与した。

ウ 乳質検査

バルク乳の成分測定を毎日実施し、乳成分の変化を飼料設計に活用した。個体乳の成分測定は、乳用牛群検定を受検し、愛知県酪農農業協同組合で行った。

エ 体格測定及び牛群審査

生後1か月齢から15か月齢までの後継牛については、毎月定期的に体重、体高および胸囲の測定を行い、発育と健康状態を把握した。成牛については、体重、ボディ・コンディション・スコア（BCS）及び蹄冠・飛節スコアの測定を毎月実施した。

また、（一社）日本ホルスタイン登録協会による牛群審査を2回受検した（令和6年6月4日、12月3日）。

オ 削蹄、毛刈り

削蹄は、肢蹄の保護、乳頭損傷防止などのため、年3回実施した。

毛刈りは、乳牛の健康維持と、衛生的に搾乳するため、下腹部、腿部、乳房周辺部、尾部等で実施した。暑熱対策として、高泌乳牛は夏場に全身の毛刈りを実施した。

(2) 給与飼料

ア 搾乳牛

搾乳牛に対しては、自給飼料を利用して調製した完全混合飼料（Total Mixed Ration、以下TMR）を主体に給与した。TMRは1日4回給与で、給与量は牛群検定成績に基づき、BCS、体重、泌乳量、乳成分、泌乳期間等を考慮して決定した。

なお、給与したTMRの平均的な配合割合及び成分は、表3・4のとおりである。

イ 分娩前後の管理

経産牛は乾乳末期、未經産牛は分娩1か月前から分娩後の慣らし飼料として乾乳期用配合飼料及び細断乾草を給与した。分娩後は、泌乳期用配合飼料とTMRの給与を行った。なお、分娩直後の牛、過肥過瘦等の牛については、餌の食い込み状況に応じ飼料を加減して調整を図った。

ウ その他

育成牛は、良質な乾草と高タンパク飼料の給与を行い、乾物摂取量の増加に留意した。

表3 TMRの設計

飼料名	給与量	
	原物量(kg)	乾物量(%)
チモシー	20	1.6
スーダングラス	220	18.7
コーン、ソルゴーサイレージ	290	6.6
ルーサンハイ	160	13.7
配合飼料	430	35.4
ビートパルプ	150	12.3
綿実	60	5.0
バイパスタパク	10	0.8
圧ペントウモロシ	60	4.7
水	1086	0
その他	14	1.2

表4 TMRの成分

成分	乾物中(%)
TDN	67.19
CP	14.88
ADF	23.27
NDF	39.76

TDN: 消化養分総量
CP: 粗タンパク質
ADF: 酸性デターゼメント繊維
NDF: 中性デターゼメント繊維

令和7年3月現在

4 優良乳用牛受精卵購入事業

(1) 事業の背景と目的

平成3年度から北米から生体輸入した牛による改良を行い、増殖していた。しかし、平成10年度を最後に防疫上の理由で更新できず、平成18年度10月末までに輸入牛は全頭廃用となった。

これらの娘牛や孫牛を中心に整備できた優良牛群を、さらにレベルアップを図り、育種価上

昇のためには新たにアップデートされた優秀な血統を導入する必要がある。

そこで、乳牛の改良先進国である北米から選定基準に合った乳牛受精卵を輸入し、所内で移植・分娩させ、これを供卵牛として利用し、受精卵移植技術を活用し優秀な娘牛及び受精卵を農家に供給する。

これにより、農家の飼養する牛群の改良が促進され、生乳生産量の増加、生乳生産コストの低減が図られ、結果として本県酪農の安定的な発展が期待される。

(2) 事業内容

平成 14 年度から毎年 10 卵程度の輸入受精卵を購入し、これらを移植して毎年度 2 頭の雌牛を生産し、供卵牛として更新することにより、供卵牛 10 頭体制を維持する。

なお、購入した受精卵は、移植・分娩、育成を経て、可能な限り未経産採卵を実施するものとし、分娩・乳量検定を終えた 2 年後に供卵牛として供用することを目指す。

(3) 輸入受精卵の選定基準

ア 供卵牛

(7) 供卵牛が経産牛の場合

a 供卵牛の総合指数等

	アメリカ	カナダ
総合指数	TPI +2300 以上	LPI +2500 以上
遺伝的能力 乳器	UDC +1.0 以上	MS +6 以上
遺伝的能力 肢蹄	FLC +0.7 以上	FL +5 以上
遺伝的能力 乳量	マイナスでないこと	

また、総合指数・乳器・肢蹄の各数値が、情報提供を受けた受精卵リストの中で最も高いものも、改良の素材として有益な長所と認め、候補受精卵に含める。

b 供卵牛の305日泌乳成績

13,000kg以上で、乳蛋白質率が3.0%以上であること。

c 供卵牛の体型得点等

決定得点85点（VG）以上、乳器及び肢蹄85点（VG）以上であること。

(イ) 供卵牛が未経産牛の場合

a 供卵牛の総合指数等

	アメリカ	カナダ
総合指数	TPI+2500 以上	LPI+2700 以上
遺伝的能力 乳器	UDC +1.0 以上	MS +6 以上
遺伝的能力 肢蹄	FLC +0.7 以上	FL +5 以上
遺伝的能力 乳量	マイナスでないこと	

また、総合指数・乳器・肢蹄の各数値が、情報提供を受けたリストの中で最も高いものも、改良の素材として有益な長所と認め、候補受精卵に含める。

イ 種雄牛

(7) 交配種雄牛が検定済みの場合

検定済種雄牛における総合指数が、次のいずれかであること。

a 乳用牛評価報告参考情報（海外種雄牛）において総合指数（NTP）上位40位以内。

b アメリカTPI 40位以内またはカナダLPI 40位以内。

c TPIが+2700以上、LPIが+2900以上。

(イ) 交配種雄牛がゲノミック ヤング ブルの場合

ゲノミック ヤング ブルにおける総合指数が、次のいずれかであること。

a アメリカTPI 40位以内または、カナダLPI 40位以内。

b TPIが+3000以上、LPIが+3200以上。

ウ その他

(ア) 家系

良好であること。

(イ) 遺伝的不良形質

原則として有しないこと。

CVM（牛複合脊椎形成不全症）、BLAD（牛白血球粘着不全症）、ブラキスパイナ（牛短脊椎症候群）並びにCD（牛コレステロール代謝異常症）のキャリアでないこと。

(4) 輸入受精卵における受胎、生産の直近5年間の状況（表5）

表5

購入年度	供卵牛名号	生産国	交配種雄牛略名 (精液コード番号)	購入卵数	移植	受胎	産子 (内は雄)	流死産
R2	パインツリー マントリン ET	アメリカ	アルタダズル (011H15036)	2	2	0	0	
R2	エンセナダ サルーン ヒーパー	アメリカ	ヒーリクス (014H07770)	3	3	1	1	
R2	デュークツト 712 マーシー	アメリカ	フラスルト (507H12788)	2	2	2	2	
R2	ピーク デビアー ET	アメリカ	アルタダズル (011H15036)	1	1	1	1	
R2	ランプレイト マグナス エムビシー ET	アメリカ	ヒーリクス (014H07770)	2	2	2	1	1
R3	シーマーズ レネゲート パリー 31017 ET	アメリカ	キヤプテイバ イテイング (250H15156)	3	3	1	1	
R3	エバーグリーンビュー ハイジホー ET	アメリカ	ビツクシヨット (014H15154)	2	2	2	2	
R3	リバーブリッジ タチ クルース	アメリカ	ステーイー (501H015618)	2	2	1	1(1)	
R3	ホーク スプレンドイト サマラ PP	カナダ	デルタラムタ (551H003379)	3	3	1	1	

購入年度	供卵牛名号	生産国	交配種雄牛略名 (精液コード番号)	購入卵数	移植	受胎	産子 (内は雄)	流死産
R4	スタントンス アルコーブ エモーション	カナダ	リムハー PP (322H000032)	2	2	0	0	
R4	スタントンス ソー ビー イット ET	カナダ	リムハー PP (322H000032)	1	1	0	0	
R4	ウインスター アストリッド ET	アメリカ	アルタケブロー (511H015655)	2	2	2	2	
R4	S-S-I ドック ハブ ノット 8783 ET	アメリカ	チーフ (513H003190)	2	2	2	2(1)	
R4	AOT ハーフエクト ホビット ET	アメリカ	リムハー PP (322H000032)	2	2	2	1	1
R4	ビーク ハニーハッシュ ET	アメリカ	アルタコーブロー (11H012124)	1	1	1	1	
R5	クレイヌック クリス レネ ゲート	カナダ	デルタラムタ (551H003379)	4	4	3	2	
R5	PLAIN-KNOLL PEAK MANDY-ET	アメリカ	ライオネル (007H014454)	1	1	1	1	
R5	レースエーカーズ ゲムデイ シヤナ ET	アメリカ	ヒーアース (507H015793)	2	2	1	1	
R5	ビーク ジンクス ET	アメリカ	マスターヒーアース (001H016483)	3	3	1	1	
R6	ダケット パーフェクト ハ ドレー	カナダ	トロップボックス (777H012399)	2	2	2		
R6	コーベン V ホーリースモー クス ノーブル	カナダ	ヘイトRC (777H012620)	2	2	0	0	
R6	KINGS-RANSOM PEAK 86539-ET	アメリカ	Rmd-Dotterer Bolt Action-ET (007H015927)	4	4	1		
R6	キングスウェイ コート ア ハイブ	カナダ	デルタラムタ (551H3379)	1	1	1		
R6	ジェノソース ライツアウト		サルート (799H0086)	1	1	0	0	

(5) 輸入受精卵産子の概要

これまでに輸入受精卵から生産された種雌牛頭数は、67頭となった（令和7年3月末）。直近6年間に購入した受精卵から生産された種雌牛の概要を表6に示した。

表6 輸入受精卵産子の概要（初産検定成績、初産分娩前に廃用となったものは除く）

購入 年度	種牛番号	父牛ショートネーム	母牛ショートネーム	検定成績（乳量：kg、成分：累計%）		
				305日実乳量		305日補正乳量
	種牛名号	生年月日	初産分娩日 子牛性別	乳脂肪率	乳蛋白質 率	無脂固形 分率
H30	712	ト ^レ アマ ^ン	テ ^レ ヒ ^レ ニ ^テ イ	7,298		9,068
	アイチ テ ^レ ヒ ^レ ニ ^テ イ ト ^レ アマ ^ン フ ^ラ ガ ^ー ET	H31.4.29	R3.2.27 メス	4.9	3.7	9.4
H30	727	エ ^ニ クス	ラ ^ブ ス ^ト ラ ^ツ ク	7,932		9,465
	アイチ ラ ^ブ ス ^ト ラ ^ツ ク エ ^ニ クス キ ^ャ ロ ^ル ET	R1.11.2	R4.1.20 メス	4.3	3.5	9.1
H30	729	ル ^ビ コン	ラ ^ビ ツ ^シ ユ	8,288		10,288
	アイチ ラ ^ビ ツ ^シ ユ ル ^ビ コン カ ^プ リ ^ー ス ET	R1.11.13	R3.11.15 メス	4.1	3.5	9.1
H30	732	エ ^ニ クス	ラ ^ブ ス ^ト ラ ^ツ ク	8,716		10,705
	アイチ ラ ^ブ ス ^ト ラ ^ツ ク エ ^ニ クス ロ ^ン ト ^ー ET	R2.1.11	R4.2.5 メス	4.2	3.5	9.0
H30	736	ル ^ビ コン	ラ ^ビ ツ ^シ ユ	8,053		9,797
	アイチ ラ ^ビ ツ ^シ ユ ル ^ビ コン ワ ^ル ツ ET	R2.1.29	R4.1.6 メス	4.3	3.4	9.1
H31	745	ダ ^ン テ	ラ ^ホ ン	9,772		12,375
	アイチ ラ ^ホ ン ダ ^ン テ ラ プ ^ソ テ ^ー イ ^ー ET	R2.4.15	R4.4.5 メス	4.3	3.2	8.9
H31	764	アル ^タ リー ^フ	フ ^ア ン ^フ アー ^レ	8,872		10,958
	アイチ フ ^ア ン ^フ アー ^レ アル ^タ リー ^フ ト ^ロ イ ^メ ライ ET	R2.11.13	R4.11.21 メス	4.35	3.32	8.92
H31	765	デル ^タ	シ ^ン ダ ^ー	9,345		11,492
	アイチ シ ^ン ダ ^ー デ ^ル タ ア ラ ^ベ スク ET	R2.12.5	R4.11.27 メス	3.59	3.17	8.88
R2	783	ヒー ^リ クス	ヒ ^ー パ ^ー	11,312		15,132
	アイチ ヒ ^ー パ ^ー ヒー ^リ クス マ ^ス ル ^カ ET	R3.7.28	R5.7.24 メス	4.1	3.2	8.7
R2	794	フ ^ラ ス ^ル ト ^ー	マ ^ー シー	-		8,672
	アイチ マ ^ー シー フ ^ラ ス ^ル ト ^ー カ ^ン ター ^タ ET	R3.11.29	R5.12.16 メス	-	-	-

購入 年度	種牛番号	父牛ショートネーム	母牛ショートネーム	検定成績（乳量：kg、成分：累計%）		
				305日実乳量		305日補正乳量
	種牛名号	生年月日	初産分娩日 子牛性別	乳脂肪率	乳蛋白質 率	無脂固形 分率
R2	797	アルタサズル	テビー	7,545		9,230
	アイチ テビー アルタサズル カノン ET	R3.12.13	R5.12.6 メス	5.6	4.0	9.5
R2	796	ヒーリクス	エムビシー	-		10,988
	アイチ エムビシー ヒーリクス ホルカ ET	R3.12.10	R5.11.10 メス	-	-	-
R2	807	フラスルト	マーシー	-		11,668
	アイチ マーシー フラスルト アンダント ET	R4.2.24	R6.2.27 メス	-	-	-
R3	814	キャプテイベイト	パリ	検定中		
	アイチ パリ CPV アンテイ フオナ ET	R4.5.9	R6.7.6 メス			
R3	815	ビツグショツト	ハイジホー	検定中		
	アイチ ハイジホー BGST ララハイ ET	R4.5.20	R6.4.6 メス			
R3	824	ビツグショツト	ハイジホー	検定中		
	アイチ ハイジホー BGST ヨーテル ET	R4.7.27	R6.7.1 オス			
R3	830	テルタラムダ	サマラPP	検定中		
	アイチ サマラPP テルタラム ダ アマービレ ET	R4.10.28	R6.9.19 メス			
R4	857	アルタケブロー	アストリト			
	アイチ アストリト アルタケブ ロー ソナタ ET	R5.7.11	育成中			
R4	860	アルタケブロー	アストリト			
	アイチ アストリト アルタケブ ロー プレリュート ET	R5.8.15	育成中			
R4	869	チーフ	ハブノツト			
	アイチ ハブノツト チーフ メ ヌエツト ET	R5.11.27	育成中			
R4	883	リムバーPP	ホビツト			
	アイチ ホビツト リムバー PP トレモロ ET	R6.3.19	育成中			

購入 年度	種牛番号	父牛ショートネーム	母牛ショートネーム	検定成績（乳量：kg、成分：累計%）		
	種牛名号	生年月日	初産分娩日 子牛性別	305日実乳量		305日補正乳量
				乳脂肪率	乳蛋白質 率	無脂固形 分率
R4	888	アルタゴ [®] プロ	ハニーハ [®] ン			
	アイチ ハニーハ [®] ン アルタゴ [®] プロ カルマート ET	R6.04.12	育成中			
R5	903	デルタラムタ [®]	クリス			
	アイチ クリス デルタラムタ [®] フェルマータ ET	R6.9.26	育成中			
R5	904	デルタラムタ [®]	クリス			
	アイチ クリス デルタラムタ [®] テスト ET	R6.10.16	育成中			
R5	909	ライオネル	マンデ [®] イ			
	アイチ マンデ [®] イ ライオネル ソナチネ ET	R6.11.12	育成中			
R5	912	ヒ [®] アース	シヤナ			
	アイチ シヤナ ヒ [®] アース テンタ [®] リー ET	R6.11.24	育成中			
R5	917	マスターヒ [®] ース	ジ [®] ンクス			
	アイチ ジ [®] ンクス マスターヒ [®] ース ジヤス [®] ET	R6.12.22	育成中			

検定関係

1 業務の概要

乳用牛群検定指導員養成事業を平成5年度より実施している。

本事業は、乳用牛群検定を普及定着化させる上で必要となる検定指導員等の養成を主目的としている。さらに、畜産総合センター主催の畜産技術研修の受講者に、乳用牛群検定の基本と意義、検定情報の活用方法等を伝え、受講者が業務等で指導員的な役割を果たせるようにすることで、乳用牛群検定の普及定着を側面的にサポートし、乳牛の改良や酪農経営の向上に資することも目的としている。

この研修を実施するために必要な研修用検定牛を、愛知県酪農農業協同組合（以下「県酪農協」という）を経由して酪農家から購入し、一産目の乳期を研修に供している間に、当場のホルスタイン種雌牛から採取した受精卵等で繁殖し、県酪農協を経由して農家へ譲渡する仕組みとなっている（図-1）。

平成9年度より当場の和牛改良基礎牛から採取した受精卵を段戸山牧場の育成牛に移植し、妊娠した牛を研修用検定牛として購入している。平成22年度より事業の見直しを行い、研修用検定牛30頭のうち18頭を検定牛Ⅰ（生涯検定牛）とし、産歴に伴う乳牛の特性等の研修のため2産目以降も飼養して研修に利用することとした。繁殖は、和牛並びに乳牛の受精卵移植のための受卵牛として活用し、種畜の供給や改良促進に資する。なお、残りの12頭は検定牛Ⅱ（初産検定牛）として、従来どおりの研修への供用、繁殖及び農家譲渡を行う。

また、愛知県乳用牛群検定普及定着化事業実施要領に基づき、平成6年度末に牛群検定情報分析センターが当場に設置され、検定農家指導のため、分析・加工した牛群検定情報を家畜保健衛生所、農林水産事務所農業改良普及課、畜産関係団体等へ提供している。

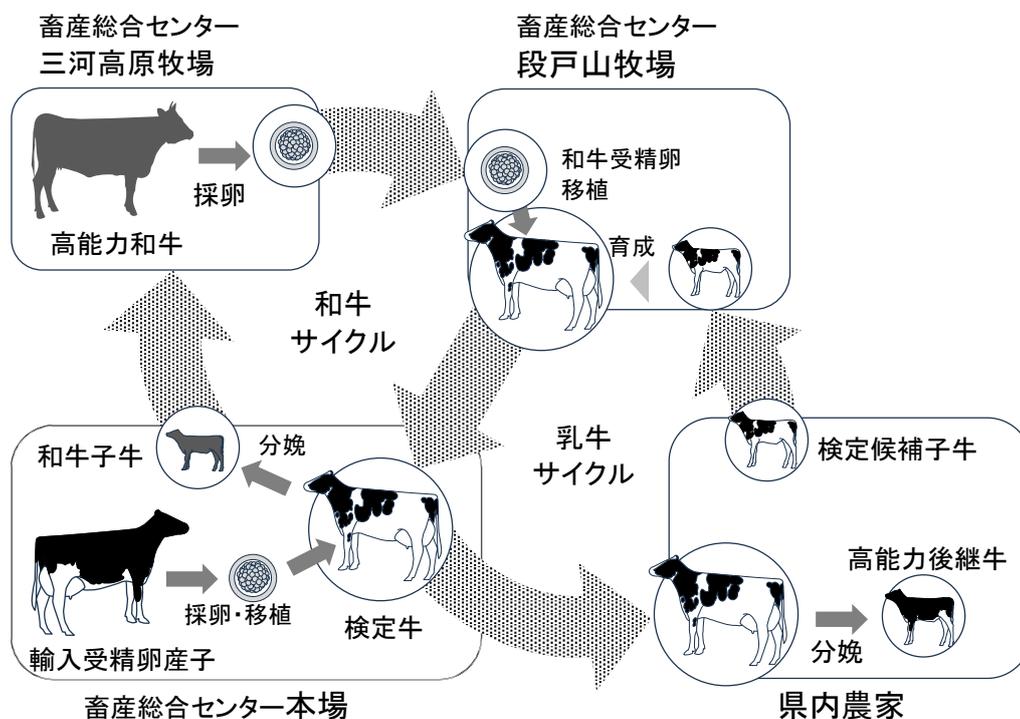


図-1 乳用牛群検定推進事業フローチャート

2 業務の実施

(1) 研修用検定牛について

ア 第 32 期研修用検定牛Ⅱの選定・導入

関係機関の協力を得て第 32 期牛 1 頭を選定して、分娩予定の約 2 か月前に導入した。

イ 研修用検定牛の飼養管理

乳牛部門のけい養牛と同様の飼養管理を行った。

ウ 検定

毎月 1 回朝・夕に各検定牛の乳量をミルクメーターにより測定し、乳成分（乳脂率、乳蛋白質率、無脂乳固形分率等）の検査は県酪農協酪農センターに依頼して行った。

エ 検定を終了した研修用検定牛の譲渡

前年度導入した研修用検定牛Ⅱについては、分娩予定の約 2 か月前に譲渡した。

(2) 牛群検定情報分析センターの情報提供について

情報提供元である（一社）家畜改良事業団から CD を媒体として情報提供を受けた。県畜産関係機関、畜産関係団体等から依頼を受け、その都度、情報提供をした（図 2）。

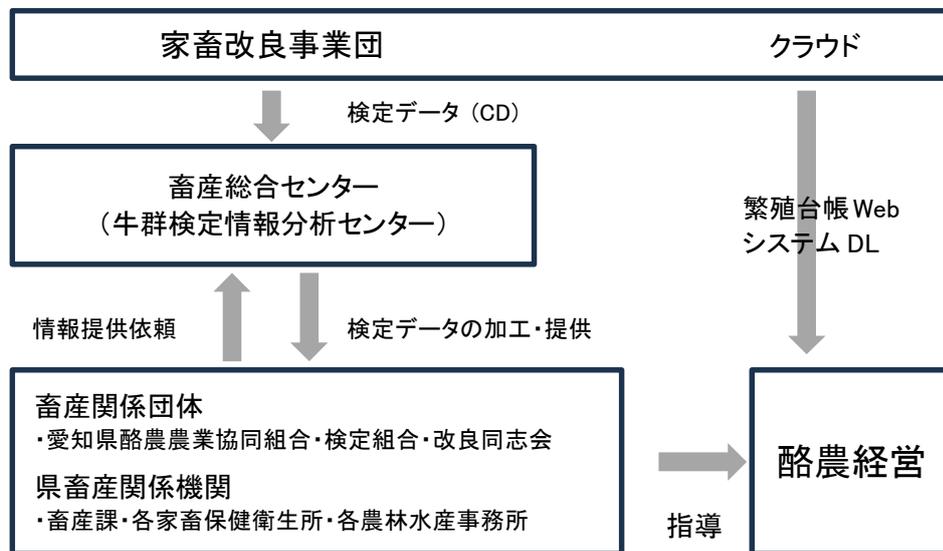


図2 牛群検定情報分析センター業務フローシート

飼料関係

1 業務の概要

畜産総合センターでは乳用牛に給与するためイタリアンライグラスやトウモロコシ等を生産しサイレージに調製している。

また、牛及び豚の排せつ物の発酵処理を行い、堆肥として圃場での飼料作物生産に全量利用することで、環境にやさしい循環型農場管理を行っている。

2 業務の実績

(1) 飼料畑の管理

ア 位置

畜産総合センター本場は東経137° 12' 30"、北緯34° 56' 10"に位置し、標高43.16mにある。

美合圃場は、本場から南に約3km離れた位置にある。

イ 面積

畜産総合センター本場では、場内に618a、農業大学校に隣接する美合に248aの飼料畑を有している。

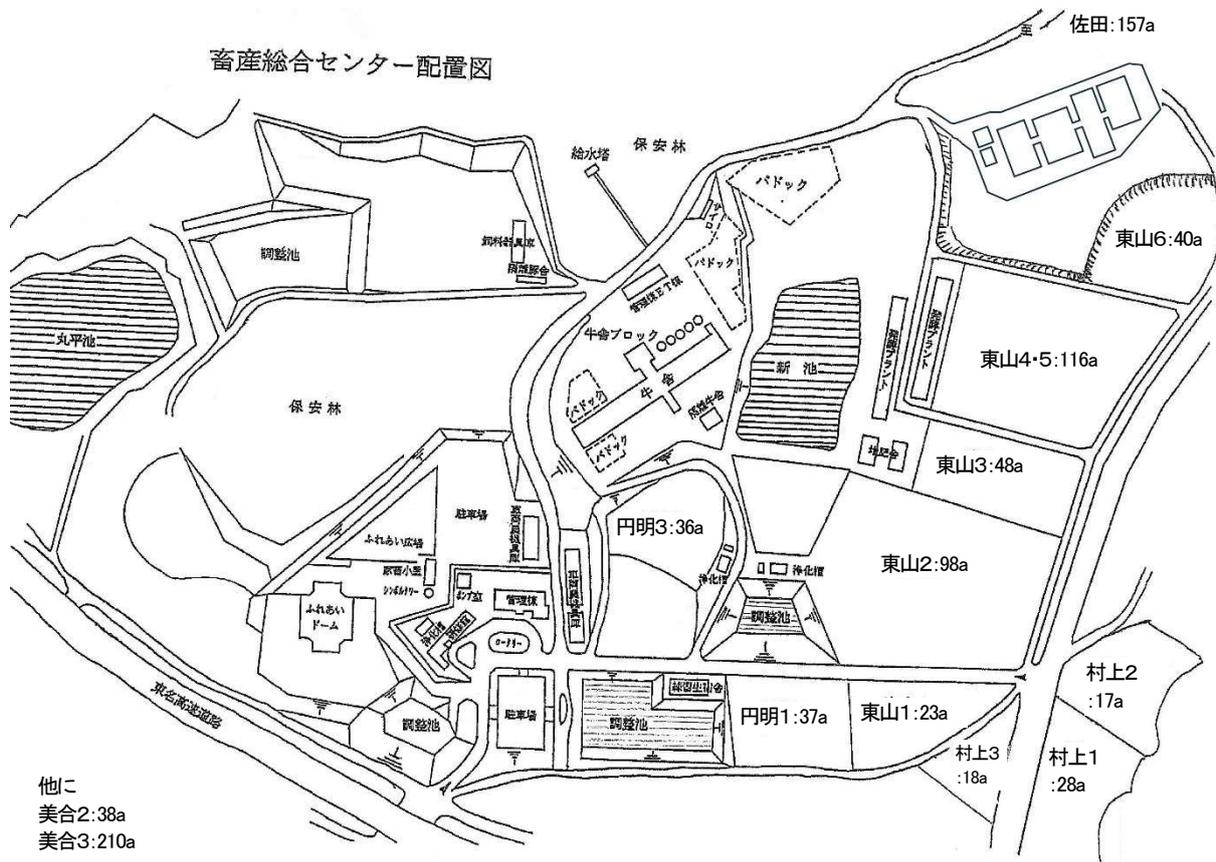


図1 畜産総合センターの飼料畑

ウ 気象

2024年の気温及び降水量の推移は図2のとおりであった。

年度平均気温は、16.9℃であり、2023年度の16.5℃より高く、平年（1991-2020平均、以下同じ）の15.8℃より1℃以上高かった。

また年間降水量は1480mmで平年（1507.8mm）に比べて少なかったが、3、5、6及び8月の雨量は多く、特に8月の降水量は250mmを越え平年の同じ月の平均雨量の倍の雨量だった。

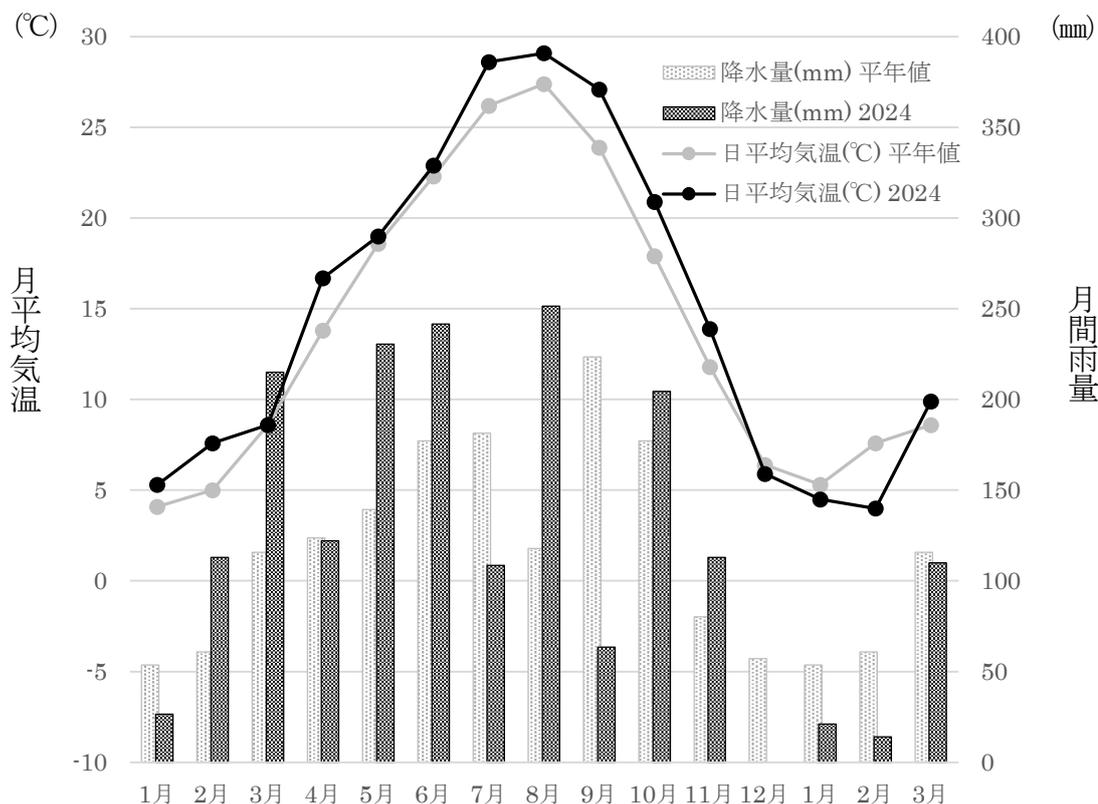


図2 気象庁アメダス岡崎観測所のデータによる気象状況（平年及び2024年）

エ 飼料畑の管理

本場内の飼料畑は花崗岩が風化した砂質で、地力が低いうえに排水も悪い。一方、美合の飼料畑は重粘土質のため、透水性が悪く、石の混入も多い。そのため、両飼料畑において、暗渠や明渠を設置して排水対策を行うとともに場内で生産した堆肥を投入し、プラウによる深耕等を行い、土壌改良を行った。

また、両飼料畑とも雑草の侵入が問題化し、特に近年はイチビやダイオウ等外来雑草の発生が多くみられる。そのため、トウモロコシやソルガムの栽培には播種時期の変更による雑草の鋤き込み、除草剤利用を行った。

また、本場敷地外から圃場内に害獣が侵入し、食害が見られ、特に食害が酷い圃場は作付け中止（佐田、村上1・2）し、捕獲わなを設置する（佐田、円明3、東山2）などの対応を行った。

(2) 飼料作物の生産

2024年度のサイレージ生産量は156.1t(対前年比74.2%)で、内訳は、トウモロコシの単播は45.9t、トウモロコシ・ソルガム混播は52.8t、ソルガム(再生草)は25.4t、イタリアンライグラスは32.0tであった。

トウモロコシ、ソルガムは、細断型ロールベールサイレージ(直径86cm×幅86cm、約300kg/ロール)に調製し426個、イタリアンライグラスはロールベールサイレージ(直径110cm×幅110cm、約250kg/ロール)に調製して114個作製した。

各圃場ごとの作付体系や収量は、表1のとおりであった。

表1 飼料畑の作付体系及び収量(2024年度)

圃場名	面積(a)	作付草種等	2024年										2025年			サイレージ収量(t)		
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
円明3	36	イタリアンライグラス	---	x							○							2
東山1	23	イタリアンライグラス	---	x														2
東山2	98	イタリアンライグラス	---	x							○							10
		トウモロコシ			○					x								18.9
東山3	48	イタリアンライグラス	---	x							○							4
		トウモロコシ			○					x								8.7
東山4・5	116	イタリアンライグラス	---	x							○							11
		トウモロコシ			○					x								11.7
東山6	40	イタリアンライグラス	---	x							○							3
		トウモロコシ			○					x								6.6
美合2	38	トウモロコシ・ソルガム						x										6.38
		ソルガム2番										x						0.4
美合3	210	トウモロコシ・ソルガム						x										46.4
		ソルガム2番										x						25.0
計	609		○播種 x収獲										計	156.08				

イタリアンライグラスについて、サイレージの品質は予乾作業を変更したことで収穫時には水分を落としることができ、良品質に調製できたが、畑へ侵入したシカの被害もあり収量は低下した。

トウモロコシについては、単播したほ場では、播種機の不調もありまき直しを行ったが、出芽率が不良のほ場があった。また、茎葉処理剤の選定のため、ほ場毎に異なる剤を使った結果、除草効果が落ちるほ場があり、雑草との競合に負け、収量が低下した。混播したほ場では、ソルガムに適用がある茎葉処理剤が限られ除草効果が得られなかったため、雑草との競合により収量が伸びなかった。今後は混播は取りやめ、トウモロコシの単播とし、効果のある除草剤を使用することにより、収量と品質の向上を目指す。

単播ソルガムについては、台風の影響により圃場周辺の樹木が倒木し、害獣用フェンスが破れて、イノシシの侵入により作付けは困難と判断し、作付けを行わなかった。

混播ほ場における再生ソルガムについては、播種を早めたことにより、気温が高い時期に再生させることができ、積算気温が十分であった結果、収量が向上した。今後は、混播は取りやめ、単播トウモロコシの後作として、散播し、収量を確保していく予定である。

(3) ふん尿の管理

ア ふん尿の発生量

(7) 乳用牛

単位：頭, t/年

区分	平均的な 飼養頭数 ①	1頭当たり排せつ物量		年間排せつ物量		
		ふん ②	尿 ③	ふん ④=①×②	尿 ⑤=①×③	合計 ⑥=④+⑤
搾乳牛	50	16.6	4.9	830.0	245.0	1,075.0
乾乳牛	20	10.8	2.2	216.0	44.0	260.0
未経産牛	10	10.8	2.2	108.0	22.0	130.0
育成牛	20	6.5	2.4	130.0	48.0	178.0
計	100	—	—	1,284.0	359.0	1,643.0

(4) 肉用牛

単位：頭, t/年

区分	平均的な 飼養頭数 ①	1頭当たり排せつ物量		年間排せつ物量		
		ふん ②	尿 ③	ふん ④=①×②	尿 ⑤=①×③	合計 ⑥=④+⑤
経産牛	5	7.3	2.4	36.5	12.0	48.5
育成牛	0	6.5	2.4	0.0	0.0	0.0
計	5	—	—	36.5	12.0	48.5

(7) 豚

単位：頭, t/年

区分	平均的な 飼養頭数 ①	1頭当たり排せつ物量		年間排せつ物量		
		ふん ②	尿 ③	ふん ④=①×②	尿 ⑤=①×③	合計 ⑥=④+⑤
子豚	340	0.2	0.3	68.0	102.0	170.0
肥育豚	500	0.8	1.4	400.0	700.0	1,100.0
母豚	120	1.2	2.6	144.0	312.0	456.0
計	960	—	—	612.0	1,114.0	1,726.0

イ ふん尿の除去方法、搬出施設

(7) 牛舎

牛舎で発生するふん尿（搾乳牛つなぎ床、単房及び群飼房）は、早朝、昼、夕の3回バーンクリナーで回収し、ダンプトラックで搬出した。早朝と夕に回収したふんは、戻し堆肥で水分調整した後、牛用乾燥ハウスで乾燥処理を行った。昼に回収したふんは、牧草残渣が多いため、戻し堆肥で水分調整した後、堆肥舎で堆積発酵させた。なお、尿は、自然流下により浄化槽に流入させた。

(4) 豚舎

豚舎で発生するふん尿は、固液分離し、ふんはスクレッパーでふんピットに搬送後、スクリーコンベアーでバケット付きフォークリフトに回収した後、豚舎エリア境界に停車したダンプト

ラックに積み込み搬出した。ふんは、戻し堆肥で水分調整した後、豚用乾燥ハウスで乾燥処理を行った。尿は、尿溜に一時貯留し、ポンプで浄化槽へ圧送した。

ウ ふん尿の処理方法

(7) ふん

ふんは、乾燥ハウスが2棟と3区画に分かれたブロアー付き堆積発酵舎、堆積発酵舎、堆肥保管舎の3棟で処理した。牛舎から搬出されたふんは、ブロアー付き堆積発酵舎に堆積され、床からブロアーで送風し発酵させた後、堆積発酵舎に移送した。

堆積発酵舎に堆積した堆肥の一部は、利用しやすい形状にするため乾燥ハウスに移送し、生ふんと混合し、更なる乾燥と破碎を行い、水分含量が低く、塊のない良質堆肥を完成させた。乾燥ハウスから搬出された乾燥ふんは、畜舎から排出されるふんの水分調整材として利用される以外は、堆肥保管舎で堆積保管した。

夏季は、乾燥ハウスでの乾燥処理能力が高いため、戻し堆肥の水分率を低くすることができ、畜舎から排出されるふん尿を十分に水分調整できるが、冬季は戻し堆肥の水分率を十分落とせないため、戻し堆肥の使用量が多くなり、十分な水分調整が困難となる。このため、夏季の乾燥堆肥をストックして、冬季に水分調整材として供用した。

(4) 尿

牛及び豚の尿は、浄化槽で活性汚泥法により処理し排水（約20 m³/日）した。浄化槽の余剰汚泥は圃場散布した。

エ 発酵堆肥の利用

(7) 散布方法

堆積発酵した堆肥を、マニアスプレッダで散布し、プラウで鋤き込んだ。

(4) 散布時期及び作付け

- ・ 5月下旬（本場のトウモロコシ作付前）
- ・ 7月中旬（本場のソルガム単播作付前）
- ・ 10月上旬（本場のイタリアンライグラス作付前）
- ・ 1月上旬から2月上旬（美合圃場のトウモロコシ・ソルガム混播作付前。名古屋競馬組合の依頼により、約168 tの馬糞堆肥を受け入れた。）

(7) 散布量

502 t（マニアスプレッダ418車散布。1車当たり1.2 tで換算。美合の馬糞堆肥は含まない。）

養 豚 課

1 業務の概要

(系統豚の維持・増殖業務)

農業総合試験場で開発されたランドレース種系統豚「アイリスL3」、大ヨークシャー種系統豚「アイリスW3」、デュロック種系統豚「アイリスナガラ」の維持・増殖を行っている。「アイリスナガラ」は平成20年2月より、「アイリスL3」は平成23年8月より、「アイリスW3」は平成29年10月より譲渡を開始している。

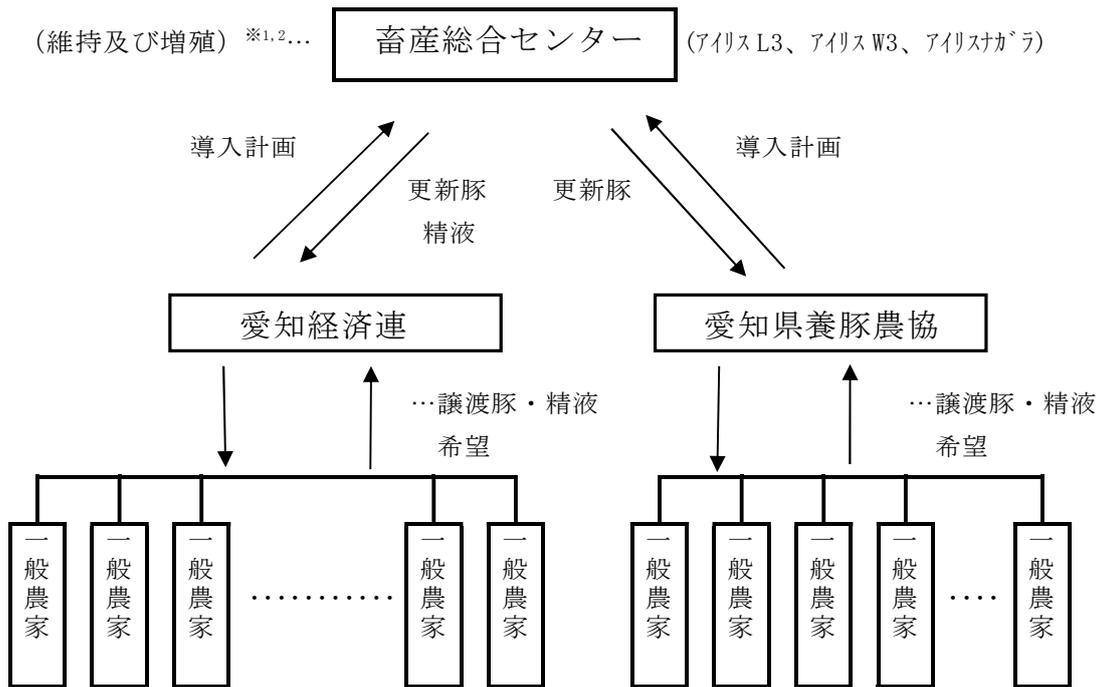


図1 維持および増殖の体系

※1・・・原々種の血統維持及び純粋種豚の増殖

※2・・・肉豚生産用F1母豚の増殖および精液供給用種畜の飼養

2 業務実績

(1) けい養種豚の現況 (令和7年3月31日現在)

単位：頭

系 統 名	アイリスL3	アイリスW3	アイリスナガラ	合 計
種 雌 豚	34	32	31	97
種 雄 豚	7	10	7	24

(2) 子豚生産状況（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

単位：頭

系統名	アイリスL3			アイリスW3			アイリスナガラ		
	♀	♂	計	♀	♂	計	♀	♂	計
生産数(4～9月)	70	56	126	124	176	300	91	103	194
生産数(10～3月)	52	65	117	124	132	256	94	99	193
合計	122	121	243	248	308	556	185	202	387

令和6年4月～令和7年3月の腹数

アイリスL3 30腹、アイリスW3 60腹、アイリスナガラ 57腹

*その他にF1 463頭(49腹)生産。

(3) 系統豚の譲渡実績（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

純粋種の譲渡に加え、F1母豚供給元である経済連実験農場の廃止により、代替措置としてF1母豚の作成・譲渡も行っている。

単位：頭

系統名	アイリスL3			アイリスW3			アイリスナガラ			F1	合計			
	♀	♂	計	♀	♂	計	♀	♂	計	♀	♀	♂	計	
譲渡数	13	7	20	70	3	73	1	42	43	86	170	52	222	

(4) 系統豚の精液譲渡実績

系統豚の精液供給元である経済連実験農場の廃止により、代替措置として平成31年2月から人工授精用精液の譲渡を行っている。

ア 精液譲渡用けい養豚（令和7年3月31日現在）

アイリスL3 5頭

アイリスW3 3頭

アイリスナガラ 29頭

イ 精液譲渡成績（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

単位：ドース

系統名	アイリスL3	アイリスW3	アイリスナガラ	合計
譲渡数	255	333	2,519	3,107

愛知の系統豚シンボルマーク
「愛とん」



3 飼養管理等

(1) 飼養体系

区 分	飼 養 形 態	豚房面積 (㎡)	備 考
種 雄 豚	単飼	2.5×2.6	一部コンクリートすのこ
精液採取用雄	単飼	3.29×1.9	一部コンクリートすのこ
若 雌 豚	2頭群飼	3.0×2.6	一部コンクリートすのこ
空胎雌豚	1~2頭群飼	3.0×2.6	一部コンクリートすのこ
妊 娠 豚	ストール	0.65×2.1	一部コンクリートすのこ
授 乳 豚	分娩柵付	1.6×2.4	プラスチックすのこ、鋳物すのこ、 ユタンボパネル
離乳子豚	1腹群飼 (10頭)	1.8×2.4	プラスチックすのこ、ユタンボパネル
育成豚(前期)	10頭群飼	2.6×2.725	全面コンクリートすのこ
” (後期)	5頭群飼	2.725×2.05	全面コンクリートすのこ
肥 育 豚	10頭群飼	2.725×3.2	全面コンクリートすのこ
若 雄 豚	単飼	2.350×1.5	全面コンクリートすのこ

(2) 給与飼料の種類と給与時期並びに給与方法

区 分	種 類	T D N (%)	C P (%)	給 与 時 期	給与方法
子 豚	餌付け用	90 以上	22.5 以上	2~25 日 齢	不断
”	人工乳A (前期)	87 以上	21.0 以上	25~30 日 齢	”
”	人工乳A (後期)	84 以上	20.0 以上	30~35 日 齢	”
”	人工乳B	80 以上	18.0 以上	35 日 齢~体重 30kg 時	”
育成豚	前 期 用	77 以上	15.0 以上	体重 30~70kg 時	”
”	種 豚 用	72 以上	14.0 以上	体重 70~105kg 時	”
種 豚	種 豚 用	72 以上	14.0 以上	候補豚選抜時~	1.4~2.8kg/日
”	”	78 以上	15.0 以上	授 乳 期	最高 8 kg/日

注) いずれも市販飼料

(3) ワクチンプログラム

対象疾病	接種豚	薬品名	投与時期	投与方法、量
日本脳炎・ パルボウイルス感染症	種豚	日脳・パルボ ワクチン	年2回 1回目(生)4月 2回目(不活化)5月	皮下、1～2ml
豚ボルデテラ感染症・ パストツレラ症	種豚	ARBP 混合不活化ワクチン	分娩65、30日前 (経産豚は分娩30日 前のみ)	筋注、5ml
大腸菌症・クロストリ ジウム感染症	種豚	リターガードLT-C	分娩23日前	筋注、2ml
大腸菌感染症(浮腫病)	子豚	エコポークシガ	7日齢	筋注、1ml
マイコプラズマ感染症	子豚	エムパック	21日齢	筋注、2ml
サーコウイルス 感染症	子豚	サーコフレックス	21日齢	筋注、1ml
豚熱	子豚	スワイバックC	20日齢	筋注、1ml
豚熱	種豚	スワイバックC	210日齢、 年1回4月一斉接種	筋注、1ml

4 豚熱(CSF)対策

(1) 防疫対策

現在、畜産総合センターで実施している主な防疫対策を以下に示す。

ア 防疫対策のルール化

- (7) 飼養衛生管理基準の遵守のための環境整備及び点検要領の策定 (H31. 1. 1～)
- (4) 愛知県畜産総合センター特定家畜伝染病防疫対策要領の策定 (R3. 4. 1. ～)

防疫対策を強化し、豚熱を始め口蹄疫等特定家畜伝染病に対応するため、「愛知県畜産総合センター豚コレラ防疫対策マニュアル(平成31年1月1日制定)」及び「愛知県畜産総合センター口蹄疫発生時対応マニュアル(平成23年1月20日制定)」を統合し、「愛知県畜産総合センター特定家畜伝染病対策要領」を策定。

イ 人の対策

(7) 職員

消毒、着替え(履き替え)によるウイルス濃度を薄める対策
衛生管理区域境界での着替え、さらに豚舎エリア境界でのシャワー及び着替え

(4) 外来者

不特定者の入場制限や施設利用者ルールの策定

ウ 車両及び物品の対策

(7) 飼料運搬

衛生管理区域境界での有人消毒、豚舎エリア境界に設置された飼料タンクへ豚舎エリア外から飼料投入

(4) 修繕工事車両

衛生管理区域境界(有人)及び豚舎エリア境界での二重消毒の実施

(ウ) 飼料以外納品

衛生管理区域外での納品(紙袋飼料含む)

エ 野生動物の対策

(7) 小動物対策

害獣駆除業者への委託、エリア周囲柵の強化、電気牧柵の設置

(イ) 野生イノシシ対策

ワイヤーメッシュ柵及び電気牧柵等による四重柵の維持管理、森林伐採による緩衝帯の維持管理

(ウ) 野鳥対策

豚舎、堆肥舎エリアへの防鳥ネット、金網の設置

(2) リスク分散対策の推進

系統豚維持群の凍結精液、凍結受精卵の作成、保管

技 術 部

人 工 妊 娠 課

人工妊娠関係

1 業務の概要

牛受精卵移植技術を活用して牛の改良増殖を推進するため、畜産総合センターが飼養する優良種雌牛からの採卵、受精卵の雌雄判別、移植、和牛受精卵の生産譲渡等の他、受精卵移植技術普及推進を図るとともに、ET車を利用した農家採卵・凍結などを行っている。

2 牛受精卵移植実用化促進事業

大家畜生産振興の一方法として受精卵移植技術の野外での普及・定着を推進するため、受精卵関連施策の総合的検討、体制整備、技術者の養成並びに技術の円滑な推進を図った。

(1) 受精卵移植技術普及推進事業

メインセンター（畜産総合センター）の技術者を講師として、サブセンター（家畜保健衛生所）の職員等に対し技術実習会を開催し、県内各地域での技術者を養成し、技術の普及・定着を図った。表1に関連する会議、実習会の概要を示す。

（内容）：事業の総合的検討・企画、推進計画、家畜人工授精、過剰排卵処理及び採卵実習、検卵・凍結処理、受精卵融解処理、経膈採卵等。

表1 令和6年度受精卵移植技術普及推進事業関連会議・実習会概要

区 分	開催回数	参集人員	対 象 者
推進会議	1回	12名	サブセンター職員、県関係機関、民間技術者
技術実習会	2	24	サブセンター職員、猿投農林高校職員および生徒、民間技術者
合 計	3	36	

(2) 技術者の養成

ア 受精卵技術者特別研修

受精卵移植技術を活用し、和牛の増産、改良を図るため、その技術について基本かつ最新技術を習得するため（独）家畜改良センターに職員を派遣している。また、研修で得た知識を県内技術者に還元している。

研修場所：独立行政法人家畜改良センター 1名

研修期間：令和6年11月18日～11月29日

イ 家畜人工授精講習会

期間：令和6年7月22日～8月29日、受講者数：牛35名、豚5名

(3) 受精卵移植施設維持管理

牛受精卵移植実用化促進事業を円滑に推進するため、メインセンターに必要な機器を整備した。令和6年度は液体窒素保存容器を整備した。

3 乳牛受精卵事業

(1) 受精卵移植技術高度化事業

受精卵移植技術は、これまで技術の高度化、生産現場での定着が進み、現在、大家畜の改良増殖の促進に大きな役割を果たしている。畜産総合センターでは、けい養牛群の整備と県内酪農家への乳牛受精卵供給センターとしての機能整備を目的として、平成3年度から平成18年度にはアメリカ・カナダより導入したスーパーカウ及びその産子より、平成17年度以降は輸入受精卵産子より採卵・移植を実施している。また、乳用牛群検定推進事業の一環として、研修用検定牛にも移植を実施している。採卵、移植成績は表2～5に示す。

その他、受精卵移植関連技術全国会議（令和7年3月 Web開催）に参加した。

表2 採卵成績

処理頭数 (実頭数)	回収 実施 頭数	回収 成功 頭数	回収 卵数	正常 卵数	凍結 保存 卵数	新鮮 移植 卵数	廃棄 卵数	平均 回収 卵数	平均 正常 卵数	平均 正常 卵率%
23(23)	23	22	158	97	79	6	0	7.18	4.41	61.4

表3 移植成績（令和7年3月末現在）

区 分	移植頭数		受胎頭数(不明頭数)			受胎率 %			
	新 鮮	凍 結		新 鮮	凍 結		新 鮮	凍 結	
種 牛	44	4	40	21(5)	1(0)	20(5)	53.8	25	57.1
検定牛	6	0	6	1(0)	0(0)	1(0)	16.7	0.0	16.7
合 計	50	4	46	22(5)	1(0)	21(5)	48.9	25	52.1

表4 年度別移植成績及び産子生産状況（令和7年3月末現在。種牛、検定牛含む。）

年度	移植 頭数	受胎 頭数	不明 頭数	受胎率 %	流産 頭数	分娩 頭数	廃用 頭数	譲渡 頭数	未分娩 頭数	産子 頭数	産子内訳		
											♀	♂	死産
R5	48	24	0	50.0	0	23	0	5	0	18	17	1	0
R6	50	22	5	48.9	0	4	0	1	17	4	4	0	0

表5 輸入受精卵産子からの採卵、移植成績（令和6年度までの累計）

供卵牛 No.	供卵牛 生年月日	採卵 回数	回収 卵数	正常 卵数	平均 回収 卵数	平均 正常 卵数	平均 正常 卵率%	移植 頭数	受胎 頭数	流産頭 数	産子数		
											♀	♂	未
645	H29. 2. 13	3	2	2	0.7	0.7	66.7	1	0	0	0	0	0
667	H29. 12. 20	2	8	5	4.0	2.5	62.5	5	2	1	1	0	0
712	H31. 4. 29	2	24	16	12.0	8.0	66.7	12	4	0	1	0	0
727	R1. 11. 2	1	25	14	25.0	14.0	56.0	4	2	0	1	0	0
729	R1. 11. 13	1	10	3	10.0	3.0	30.0	3	2	0	1	1	0
732	R2. 1. 11	1	12	8	12.0	8.0	66.7	5	2	0	1	0	0
764	R2. 11. 13	1	5	0	5.0	0.0	0.0	0	0	0	0	0	0
765	R2. 12. 5	1	8	2	8.0	2.0	25.0	1	1	0	1	0	0
783	R3. 7. 28	1	7	0	7.0	0.0	0.0	0	0	0	0	0	0
794	R3. 11. 29	1	10	6	10.0	6.0	60.0	4	1	0	1	0	0
796	R3. 12. 10	1	4	4	4.0	4.0	100.0	3	1	0	1	0	0
797	R3. 12. 13	1	9	7	9.0	7.0	77.8	4	1	0	1	0	0
807	R4. 2. 24	2	28	9	14.0	4.5	32.1	2	0	0	0	0	0
815	R4. 5. 20	1	10	10	10.0	10.0	100.0	6	3	0	1	0	0
824	R4. 7. 27	1	2	1	2.0	1.0	50.0	1	1	0	0	0	1
830	R4. 10. 28	1	2	2	2.0	2.0	100.0	0	0	0	0	0	0
857	R5. 7. 11	1	17	5	5.0	5.0	29.4	2	1	0	0	0	0
860	R5. 8. 15	1	19	16	16.0	16.0	84.2	6	3	0	0	0	0
869	R5. 11. 27	1	11	6	6.0	6.0	54.5	2	1	0	0	0	0
合計		24	213	116	8.9	4.8	54.5	61	25	1	10	1	1

(2) 牛雌雄産み分け技術実証展示事業

畜産総合センターでは、LAMP（Loop-mediated Isothermal Amplification）法と呼ばれる牛受精卵から雄に特異的な遺伝子を検出する雌雄判別技術を活用して雌雄を産み分け、雌種畜供給機能の拡充を図っている。この技術は、熟練した高度な技術を必要とするため、研修を受講し、技術者の養成及び技術の研鑽を行っている。また、近年普及した性選別精液を用い、より効率的な雌受精卵の生産手法についても検討を行っている。

また、雌雄産み分け技術共同試験（今年度より繁殖技術共同試験に統合）に参加し効率的な雌受精卵の生産手法改善に努めている。令和6年度の雌雄産み分け技術共同試験（繁殖技術共同試験）への参加機関は、愛知県ほか22道県およびグループ（北海道、宮城県、新潟県、山梨県、栃木県、茨城県、神奈川県、岐阜県、静岡県、三重県、滋賀県、鳥取県、島根県、岡山県、愛媛県、広島県、山口県、福岡県、熊本県、宮崎県、大阪公立大、岩手大）であり、共同試験推進会議には令和6年6月及び令和7年3月の2回（いずれもWeb開催）参加した。

(3) バイテク技術活用事業

畜産総合センター（メインセンター）では、平成3年度から7年度まで受精卵移植モデル事業（消国）により、受精卵供給施設（E T車）を整備・活用し、家畜保健衛生所（サブセンター）の協力を得て、パイロット的にモデル農家で採卵及び移植を行い、農家での牛群改良等実証展示を実施した。平成8年度から16年度までは、E T車を活用した農家庭先採卵の事業継続希望に応えるため、バイテク技術活用促進事業で農家の組織化（グループ化）し、グループ内での優秀な供卵牛から採卵を行い、主に組織内での受精卵流通と地域の牛群整備を目的に事業を実施した。

平成17年度からは、農家からの事業継続要望に応じてE T車を更新した。事業実施体制も変更し民間で実施困難な部分を県が担当することとした上で、担当部分の有料化を行い、農家及び地域における牛群整備とさらなる受精卵移植技術の定着を目的にバイテク技術活用事業として再スタートし、現在も継続している。図1に実施体制を図解化して示す。成績は表6、7及び8に示した。

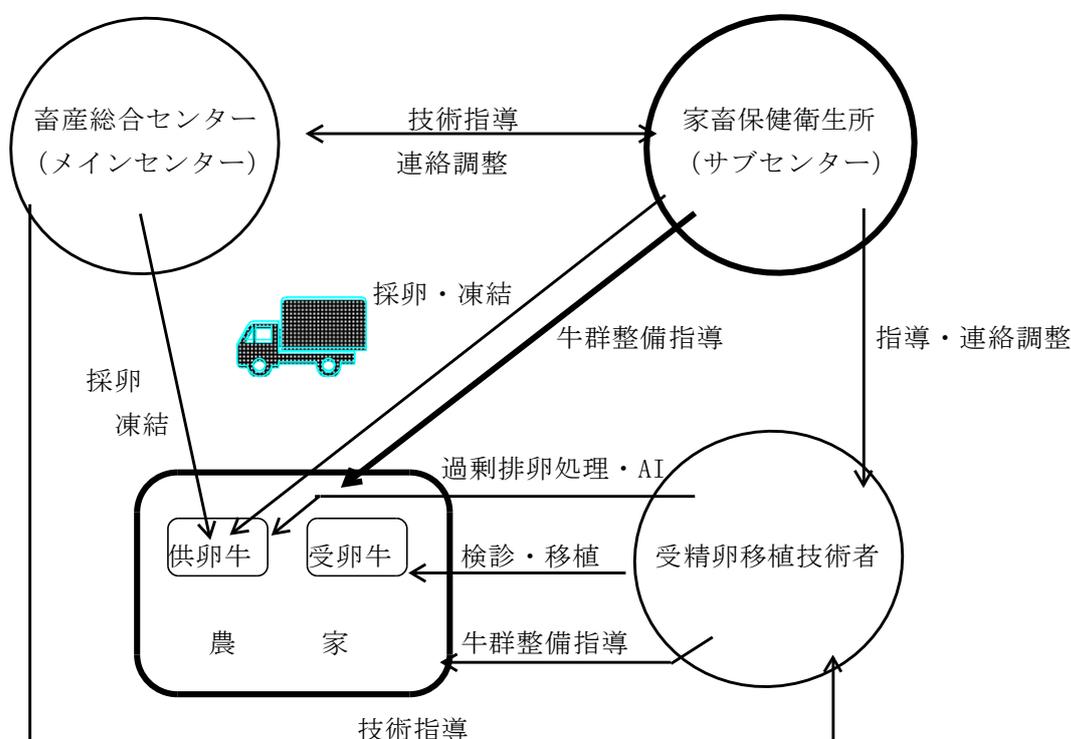


図1 実施体制

表6 採卵成績（令和7年3月末現在）

区分	回収実施頭数	回収成功頭数	回収卵数	正常卵数	凍結保存卵数	新鮮移植卵数	廃棄卵数	平均回収卵数	平均正常卵数	平均正常卵率%
乳用牛	1	1	10	6	4	2	0	10.0	6.0	60.0
肉用牛	29	29	427	164	114	35	15	14.7	5.7	38.8
計	30	30	437	170	118	37	15	14.6	5.7	39.0

表7 サブセンター別採卵実施頭数

区分	尾張	西部	中央	豊田加茂	新城設楽	東部	計
乳用牛	0	0	0	1	0	0	1
肉用牛	1	2	3	4	19	0	29
計	1	2	3	5	19	0	30

表8 年度別移植成績及び産子生産状況（令和7年3月末現在）

年度	移植頭数	受胎頭数	不明頭数	受胎率%	流産頭数	分娩頭数	廃用頭数	未分娩頭数	産子頭数	産子内訳			備考
										♀	♂	死産	
R2	339	110	64	40.0	4	58	0	48	58	28	27	3	双子1
R3	320	100	59	38.3	0	57	1	42	57	28	25	3	性別未報告1
R4	298	98	104	50.5	3	66	1	28	66	36	27	3	性別未報告1
R5	193	89	62	67.9	4	51	0	34	51	23	28	0	
R6	110	33	44	50.0	0	8	0	25	8	2	6	0	
合計	1,260	430	333	46.4	11	240	2	177	240	117	113	9	性別未報告2 双子1

4 和牛受精卵事業

(1) 和牛受精卵譲渡事業

受精卵移植により和牛の増産を図るため、畜産総合センター（メインセンター）けい養の和牛供卵牛より採卵し、指定団体（県酪農協）に有償譲渡した。また、家畜保健衛生所（サブセンター）の協力を得て移植技術者との連絡調整並びに農家指導を実施し、県内肉用牛生産振興に努めた。図2に実施体制を図解化して示す。実施成績は表9、10及び11に示す。

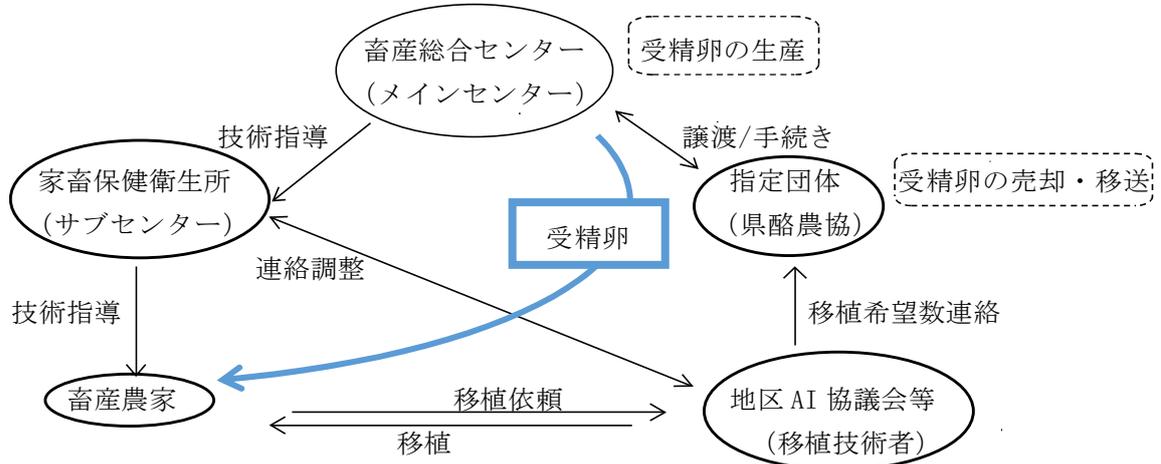


図2 実施体制

表9 採卵成績及び譲渡実績

処理頭数 (実頭数)	回収 実施 頭数	回収 成功 頭数	回収 卵数	正常 卵数	凍結 保存 卵数	新鮮 移植 卵数	廃棄 卵数	平均 回収 卵数	平均 正常 卵数	平均 正常 卵率%	譲渡 計画 卵数	譲渡 卵数
41(15)	41	41	516	298	285	0	13	12.6	7.3	57.8	370	343

表10 地域別移植成績（令和7年3月末現在）

サブセンター	移植 卵数	移植頭数		受胎頭数(不明頭数)			受胎率 %			移植 者数	
		新鮮	凍結	新鮮	凍結	新鮮	凍結	新鮮	凍結		
尾張	9	9	0	9	1 (3)	0 (0)	1 (3)	16.7	-	16.7	5
西部	35	35	0	35	11 (8)	0 (0)	11 (8)	40.7	-	40.7	9
中央	15	15	0	15	2 (5)	0 (0)	2 (5)	20.0	-	20.0	6
豊田加茂	30	30	0	30	9 (10)	0 (0)	9 (10)	45.0	-	45.0	5
新城設楽	21	21	0	21	7 (3)	0 (0)	7 (3)	38.9	-	38.9	4
東部	90	90	0	90	7 (76)	0 (0)	7 (76)	50.0	-	50.0	17
段戸山	10	10	0	10	0 (10)	0 (0)	0 (10)	-	-	-	4
合計	210	210	0	210	37 (115)	0 (0)	37 (115)	38.9	-	38.9	50

注) 凍結の数字はすべてダイレクト卵移植によるもの

表 11 年度別移植成績及び産子生産状況（令和 7 年 3 月末現在）

年 度	移植頭数	受胎頭数	不明頭数	受胎率%	流産頭数	分娩頭数	廃用頭数	未分娩頭数	産子頭数	産子内訳		
										♀	♂	死産
R1	316	126	1	40.0	4	96	3	23	96	45	45	6
R2	339	139	1	41.1	4	103	2	31	103	41	55	7
R3	298	126	2	42.6	6	88	8	24	88	36	50	2
R4	310	108	48	41.2	4	90	1	13	90	44	39	7
R5	289	99	25	37.5	4	56	8	37	56	24	27	5
R6	210	37	115	38.9	1	6	1	29	6	3	3	0
合 計	1762	635	192	40.4	23	439	23	157	439	193	219	27

(2) 受精卵産子保留奨励事業

受精卵移植により生産される優秀な和牛雌子牛の繁殖資源としての保留を奨励するため、畜産総合センターけい養供卵牛の育種価をより早く明らかにする目的で、受精卵産子（供卵牛の直子を含む）の枝肉成績の収集を愛知県和牛改良協会に委託した。

(3) 牛群改良整備事業

和牛の改良先進県（鹿児島県、宮崎県等）から導入した改良基礎雌牛等の受精卵を、段戸山牧場で育成中の研修用検定候補牛及び本場の生涯検定牛に移植し、供卵候補牛を生産することにより三河高原牧場の牛群改良整備を行った。令和 6 年度の採卵成績を表 12 に、令和元年～6 年度の移植成績を表 13 にそれぞれ示す。

表 12 採卵成績

処理頭数 (実頭数)	回収 実施 頭数	回収 成功 頭数	回収 卵数	正常 卵数	凍結 保存 卵数	新鮮 移植 卵数	廃棄 卵数	平均 回収 卵数	平均 正常 卵数	平均 正常 卵率%
25(14)	25	25	178	110	105	2	3	7.1	4.4	61.8

表 13 年度別移植成績及び産子生産状況（令和 7 年 3 月末現在）

年 度	移植頭数	受胎頭数	不明頭数	受胎率 (%)	流産頭数	分娩頭数	廃用頭数	未分娩頭数	産子頭数	産子内訳		
										♀	♂	死産
R1	28	16	0	57.1	0	16	0	0	16	11	4	1
R2	32	18	0	56.3	0	18	1	0	18	4	13	1
R3	31	20	0	64.5	4	16	0	0	16	5	11	0
R4	31	17	0	54.8	2	15	0	0	15	8	6	1
R5	30	11	1	37.9	2	8	1	0	8	5	3	0
R6	22	8	1	38.1	0	2	0	6	2	2	0	0
合計	174	90	2	52.3	8	75	2	6	75	35	37	3

研修指導関係

当センターでは対象者別に各種研修を行っている。畜産農家、畜産技術者に対しては畜産新技術の向上普及を目的とした研修を、また一般県民に対しては畜産への正しい理解と畜産物消費拡大を目的とした体験型研修を行っている。業務の推進に当たっては、新型コロナウイルス感染症対策、特定家畜伝染病の防疫対策及び熱中症対策を行いながら実施した。

1 畜産関係職員畜産技術研修

県畜産関係職員（家畜保健衛生所、農林水産事務所）を対象に、専門的な技術・知識を深め、指導能力の向上を図ることを目的として畜産技術研修を実施した。表1に内訳を示す。

表1 畜産関係職員畜産技術研修内訳

区分	指導担当課	人数	受講生所属機関	研修期間
基礎研修	酪農課	1	西部家畜保健衛生所	計6日（9月中旬～10月上旬）
専門研修	養豚課	1	西三河農林水産事務所	計4日間（9月下旬）
	養豚課	1	豊田加茂農林水産事務所	計10日間（10月）
	養豚課	1	尾張農林水産事務所	計5日間（10月上旬）
	段戸山牧場	1	西部家畜保健衛生所	計2日（10月中旬）
	養豚課	1	豊田加茂農林水産事務所	計5日間（10月中旬）
	段戸山牧場	1	新城設楽農林水産事務所	計3日（10月下旬）
	酪農課	1	新城設楽農林水産事務所	計3日間（11月下旬）
計（のべ）		7（8）名	5（8）機関	26（38）日間

2 後継者養成研修

(1) 大学生インターンシップ

愛知県において獣医・畜産関係への就職を目指す大学生を対象とし、①愛知県学生実習生受け入れ制度（学振インターン）（依頼元：愛知県学事振興課）、②家畜衛生・公衆衛生インターンシップ制度（岐大インターン）（依頼元：岐阜大学）及び③行政体験研修制度（行政体験）（依頼元：中央家畜保健衛生所）により、当センター人工妊娠課、酪農課、養豚課、和牛改良課、段戸山牧場及び種鶏場において研修を行った。表2に内訳を示す（受け入れ人数は各大学から1名であった）。

表2 大学生インターンシップ内訳

制度	指導担当課	大学・学部・学科名	当センター研修日
学振インターン	養豚課、酪農課、種鶏場、和牛改良課、段戸山牧場	東京農業大学農学部 動物科学科	9/9～9/13
岐大インターン	酪農課、人工妊娠課	岐阜大学応用生物科学部 共同獣医学科	8/6

制度	指導担当課	大学・学部・学科名	当センター研修日
行政体験	酪農課、人工妊娠課	岡山理科大学獣医学部 獣医学科	7/25
	酪農課、段戸山牧場	鹿児島大学共同獣医学部 獣医学科	8/21～22
	酪農課、段戸山牧場	日本大学生物資源科学部 獣医学科	8/21～22
	種鶏場、和牛改良課、 酪農課	麻布大学獣医学部 獣医学科	9/2, 4, 5
	種鶏場、和牛改良課、 酪農課	酪農学園大学獣医学群 獣医学類	9/2, 4, 5

(2) 体験及び一般・学生研修

畜産農家及び就労移行支援事業所から、本県の畜産支援に必要な技術を習得するための実習依頼を受け、研修生を受け入れた。表3に内訳を示す（受入れ人数は各1名であった）。

表3 体験及び一般・学生研修内訳

制度	指導担当課	依頼元	研修期間
技術研修	酪農課	酪農家（田原市）	6/18～20
職場体験	酪農課	就労移行支援事業所（豊田市）	7/18, 19

3 畜産加工体験等研修、その他施設利用

県民に対して畜産への理解を深めるため、畜産加工体験研修や共進会等の開催を受け入れた。内訳を表4に示す。

表4 畜産加工体験等研修、その他施設利用

区分	担当課・主催	利用施設	研修名	利用者数	開催日
研修	人工妊娠課	研修棟	畜産加工体験研修	335	通年（76日）
	酪農課、養豚課、 人工妊娠課	センター全体	家畜人工授精講習 会及び修業試験	40	7/22～8/29
	酪農課、人工妊娠課	センター全体	家畜受精卵移植講 習会（牛）	-	-（隔年開催）
施設 利用	一般	ふれあいドーム	ふれあいドームス ポーツ利用	967	通年（のべ167 日）
	愛知県酪農農業協同 組合	大会議室・ ふれあいドーム	家畜共進会	390	11/10、3/25

和牛改良課（三河高原牧場）

1 地理的概要

(1) 位置

岡崎市の北東 35km に位置し、矢作川の支流と巴川の源にあり、標高約 600m の三河高原にある牧場で、おおよそ 26ha の面積を有する。

(2) 気象

一般に夏は涼しく過ごしやすい。冬は朝晩冷え込み日温度差が大きい、積雪量は少ない。また、冬は北あるいは北西の季節風が強い。

令和 6 年は、年間降水量 2,350mm、9 時平均年間気温 14.6℃、最高気温 38.0℃（7 月 18 日）、最低気温 -5.7℃（1 月 13 日）であった。前年と比較して降水量は 11mm 減少し、平均気温は 0.7℃ 高かった。年間の気温の状況は表 1 のとおりであった。

表 1 月別平均気温（羽布ダム管理事務所観測データ） 単位：℃

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年間
区分														
AM 9 時	R6 年	1.3	4.0	5.2	14.8	16.9	20.6	27.5	27.6	24.9	18.7	11.3	2.4	14.6
	R5 年	0.4	2.3	8.9	13.0	16.6	20.5	25.3	25.9	23.9	14.8	10.0	4.0	13.9
最 高	R6 年	6.7	9.1	9.1	18.3	20.6	23.9	31.2	32.2	28.4	22.1	15.2	6.9	18.7
	R5 年	5.6	8.1	14.1	17.3	20.7	23.7	29.2	29.4	27.5	19.4	14.7	9.3	18.3
最 低	R6 年	-1.5	0.9	1.1	9.7	11.5	16.1	22.9	23.4	20.3	15.0	7.2	-1.0	10.5
	R5 年	-2.6	-1.5	3.4	7.2	11.7	16.2	20.4	21.9	19.8	9.6	5.6	0.4	9.4

2 施設の概要

当牧場の施設は、図 1 に示したとおりである。

放牧場のほかに、牛舎 1 棟、育成牛舎 1 棟、管理棟、トイレ、家畜小屋（現在、空舎）及びパドック（牛の運動場）からなる。

場内の牧草内にある遊歩道は、衛生対策のため令和 3 年 3 月から閉鎖している。

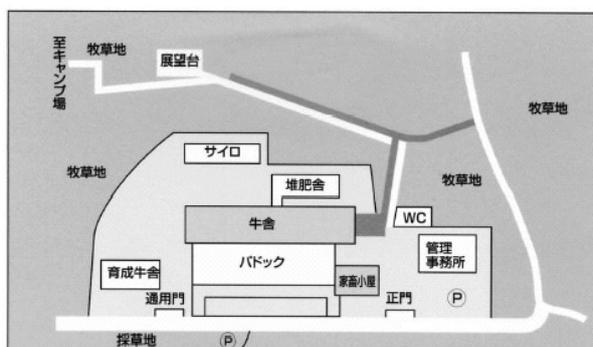


図 1 三河高原牧場の施設概略図

3 業務内容及び実績

(1) 繁殖雌牛の日常管理

当牧場は、繁殖雌牛 33 頭、育成牛（12 か月齢以上） 7 頭をけい養している。

通年昼間放牧とし、5 月から 11 月までは放牧地での自由採食、12 月から 4 月までは放牧地及び舎内で乾草 8 kg/頭を給与した。

配合飼料は、栄養度（栄養状態を示す指数）と飼養ステージ（妊娠状況、哺乳など）にあわせて給与量を決定した。

分娩牛は、予定日の 2 週間前から放牧を中止して舎内飼養とし、また、昼間の分娩を目的として飼料給与を午後 4 時以降にした。

さらに、分娩予測のため予定日 1 週間前から夕方の体温測定を行った。その結果、前日より 0.2～0.5℃の体温低下が認められた場合には 24 時間以内に分娩することが多かった。

分娩後、概ね 1 週間を経過した後は母子ともにパドックへ出し、分娩後 1 か月後から母牛のみ昼間放牧し、制限哺乳とした。

4 月から 6 月に成牛と繁殖候補の育成牛にイバラキ病ワクチン及び牛異常産 4 種混合不活化ワクチンを接種した。

また、分娩前の妊娠牛には牛下痢 5 種混合不活化ワクチンを接種した。

加えて、飼養牛の衛生検査（ヨーネ病と牛伝染性リンパ腫検査）を 1 月に実施した。

(2) 子牛の生産

生産状況については表 2 に示した。

生まれた 25 頭のうち、6 頭は本場の乳牛を利用した受精卵移植産子で、2 頭は牧場の和牛から生まれた受精卵移植産子であった。また、本場受精卵移植で双子が生まれている。なお、死産が 1 頭あり、実際の生産は 24 頭であった。

(3) 子牛の日常管理

毎月 1 回、体重、体高、胸囲及び腹囲を測尺し、発育状況を確認するとともに飼料給与状況など飼養管理の指標とした。

生後 1 週間から哺育用飼料ひと握りの配合飼料を給与し餌付けを開始した。成長とともに飼料を増量した。詳細な給与形態については表 3 に示した。

生後概ね 1 週間までは牛舎内、1 か月齢まで母とともにパドック、その後、母牛を放牧に出すため、昼間は母子別飼とし、制限哺乳とした。その後、約 3 か月齢で離乳した。

雄子牛の去勢は約 2 か月齢で実施し、雌は、約 3 週齢で除角した。

衛生対策として、牛 6 種混合ワクチンを 4～7 か月齢で実施した。また家畜市場出荷の子牛については、スモール出荷では出荷約半月前、素牛出荷では出荷約一か月前に牛ヘモフィルス不活化ワクチンを 1 回接種した。

表2 子牛の生産状況

No.	名号	生年月日	性別	生時 体重	血 統			譲渡販売等
					父	母	母の父	
1	はる23	R6/04/05	雌	25.1	安福久	第1はるみ2	耕富士	保留
2	久久里E23	R6/04/24	♂	45.1	安福久	みくり23	百合白清2	1月市場出荷
3	すずめE23	R6/04/28	雌	30.0	安福久	つぐみ23	百合茂	3月譲渡
4	久久姫E23	R6/05/16	♂	40.0	安福久	きたひめ23	百合白清2	1月市場出荷
5	福富士23	R6/05/29	♂	31.0	福之姫	うずめ51	耕富士	3月市場出荷
6	国松23	R6/06/10	♂	36.0	美国桜	まつこ	耕富士	3月市場出荷
7	姫之清23	R6/07/03	♂	34.8	福之姫	しらな23	百合白清2	3月市場出荷
8	なっぱ23	R6/07/08	雌	29.0	美国桜	てるよ23	関平照	保留
9	久百合福23	R6/07/26	♂	36.4	福之姫	ひさゆり23	百合茂	5月市場出荷予定
10	鵬美23	R6/07/31	♂	38.5	美国桜	しょうこ676	白隆鵬	5月市場出荷予定
11	きずなE23	R6/07/29	雌	35.9	安福久	しらな23	百合白清2	5月譲渡予定
12	しげまるE23	R6/08/15	雌	43.7	安福久	しげふく23	福之姫	5月譲渡予定
13	あけぼのE23	R6/08/28	雌	45.5	安福久	第1はるみ2	耕富士	5月譲渡予定
14	嵐士23	R6/08/31	♂	35.1	北美津久	つぐみ23	百合茂	5月市場出荷予定
15	北海23	R6/09/26	♂	43.4	北美津久	しげふく23	福之姫	7月市場出荷予定
16	美空23	R6/09/20	♂	29.8	美国桜	ふみこ23	茂洋	7月市場出荷予定
17	福賀北23	R6/10/30	♂	35.5	北美津久	よしふく23	福之姫	7月市場出荷予定
18	ふゆき23	R6/12/08	雌	37.9	福勝鶴	ゆりえ23	百合茂	保留
19	しまえなが23	R6/12/17	雌	41.0	北美津久	つばめ23	福之姫	保留
20	しげゆきE23	R7/01/20	雌	41.4	安福久	しげふく23	福之姫	保留
21	しげつきE23	R7/01/20	雌	41.4	安福久	しげふく23	福之姫	11月譲渡予定
22	しげはな23	R7/01/20	雌	37.6	北美津久	しげぞう23	勝忠平	11月譲渡予定
23	鶴之富士23	R7/02/20	♂	33.8	福之鶴	みち7の255	耕富士	11月市場出荷予定
24	勝之富士23	R7/03/09	♂	32.3	福勝鶴	ひな3	耕富士	11月市場出荷予定
内 訳	ET産子		♂	2	生時体重	平均	42.6 kg	
			雌	6	生時体重	平均	39.7 kg	
	AI産子		♂	11	生時体重	平均	35.1 kg	
			雌	5	生時体重	平均	34.1 kg	
			24	生時体重	平均	36.7 kg		

注) ET産子にEと記載

表3 子牛の飼料給与内容

区分	月齢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
配合飼料		哺育用配合飼料			育成用配合飼料								
	雌	0-0.5	1.0	1.5	3.0	3.0	3.5	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
	雄	0-0.5	1.0	1.5	3.5	4.0	4.0	4.0	4.0	-	-	-	-
粗飼料		チモシー			チモシー・スーダングラス								
	雌、雄	0-0.3	1.0	1.5	1.5	2.0	2.5	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0

注) 粗飼料については目安で、実際は8か月齢程度までは飽食

(4) 子牛の譲渡・販売等

ア 雌子牛

愛知県経済農業協同組合連合会を通じて和牛繁殖農家へ6頭譲渡した(表4)。

表4 雌子牛の譲渡状況

No.	名号	生年月日	性別	生時 体重	血 統			譲渡販売等
					父	母	母の父	
1	ひこぼしE23	R5/07/07	雌	35.0	美国桜	りょう23	諒太郎	JA愛知東
2	きよめE23	R5/09/13	雌	35.0	百合白清2	うずめ51	耕富士	JA愛知東
3	やすなE23	R6/01/03	雌	50.3	安福久	しらな23	百合白清2	JA愛知東
4	しげざくらE23	R6/01/09	雌	37.0	美国桜	しげこ23	茂洋	経済連下山駐在所
5	さんみゆ23	R6/03/23	雌	35.1	百合福久	ふじみゆ	耕富士	経済連下山駐在所
6	すずみE23	R6/04/28	雌	30.0	安福久	つぐみ23	百合茂	経済連下山駐在所

注) E T産子にEと記載

イ 雄雌子牛

あいち家畜市場で18頭販売した。詳細は表5のとおり。

表5 雄雌子牛の販売状況(あいち家畜市場)

No.	名号	生年月日	性別	生時 体重	血 統			出荷 日齢	出荷 体重	日増 体重
					父	母	母の父			
1	なつE23	R5/07/05	雌	37.9	関平照	あつひめ23	茂洋	338	308	0.80
2	つばさ23	R5/08/02	雌	36.8	関平照	つばめ23	福之姫	310	314	0.89
3	ぶくぶく23	R5/08/10	雌	36.5	福増	みゆみゆ23	実有貴	302	329	0.97
4	国白勝23	R5/09/18	♂	31.9	美国白清	しげぞう23	勝忠平	200	220	0.94
5	福百23	R5/10/29	♂	31.2	福之姫	ゆりえ23	百合茂	174	191	0.92
6	百合百合23	R5/11/09	♂	35.3	百合白清	よしよし23	芳之国	194	199	0.84
7	国土E23	R5/11/18	♂	36.4	美国桜	まつこ	耕富士	183	187	0.82
8	久士	R5/12/05	♂	44.6	安福久	第1はるみ2	耕富士	185	223	0.96
9	桜勝E23	R6/01/18	♂	23.8	美国桜	ふくふく	勝忠平	293	302	0.95
10	姫茂23	R6/01/27	♂	39.5	福之姫	みわ	福晴茂	284	297	0.91
11	諒悟23	R6/02/20	♂	46.7	福之姫	りょう23	諒太郎	260	240	0.74
12	安之23	R6/02/24	♂	42.9	福之姫	やすしげ23	安福久	256	309	1.04
13	耕平23	R6/03/18	♂	40.7	福之姫	はなきよ23	百合白清2	296	263	0.75
14	久久里E23	R6/04/24	♂	45.1	安福久	しらな23	百合白清2	259	269	0.86
15	久久姫E23	R6/05/16	♂	40.0	安福久	しらな23	百合白清2	237	258	0.92
16	福富士23	R6/05/29	♂	31.0	福之姫	うずめ51	耕富士	280	301	0.96
17	国松23	R6/06/10	♂	36.0	美国桜	まつこ	耕富士	268	280	0.91
18	姫之清23	R6/07/03	♂	34.8	福之姫	しらな23	百合白清2	245	281	1.00

注) E T産子にEと記載

(5) 和牛受精卵の採取

技術部人工妊娠課が実施する和牛受精卵の採取に協力した。採卵成績については人工妊娠課 4 (1) イ項参照。

(6) 牧草地の利用

省力的な管理方法を実践し、牧野は年間を通じて昼間放牧利用した。放牧実績と管理状況の詳細は表 6 のとおり。

表 6 牧草地の利用（放牧延べ頭数等）

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間
1区	放牧	0	28	27	71	52	0	102	28	0	0	0	0	308
	管理	堆肥						液肥					堆肥	液肥
2区	放牧	98	168	158	144	125	142	139	166	212	213	169	500	2234
	管理		堆肥	堆肥						堆肥	堆肥	堆肥	堆肥	
3区	放牧	147	166	110	93	229	194	161	110	240	271	226	120	2067
	管理					堆肥	堆肥	堆肥			堆肥	堆肥	堆肥	
4区	放牧	267	55	111	139	107	110	106	139	213	109	225	89	1670
	管理		液肥			液肥	液肥				液肥	液肥		
5区	放牧	129	111	133	94	51	110	137	160	161	192	165	180	1623
	管理		堆肥			堆肥	堆肥		堆肥					
北区	放牧	0	362	205	164	221	249	238	192	0	0	0	0	1631
	管理	堆肥		堆肥	堆肥		堆肥	堆肥	堆肥	堆肥	堆肥			
南圃場	放牧	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	管理													

注) 11月下旬～5月上旬は放牧地において乾草を給与

(7) 肉用改良基礎雌牛の導入

肉用改良基礎雌牛として2頭の雌子牛を令和7年2月に長野県から導入した（表7）。

表 7 令和6年度導入雌子牛

No	名号	生年月日	血統			
			父牛	母牛	母の父牛	祖々父牛
1	きたみこは	R6. 4. 21	北美津久	こはる	諒太郎	美徳国
2	みつほ	R6. 4. 25	北美津久	おりゅう	安福久	百合茂

段戸山牧場

段戸山牧場の概要

段戸山牧場は 220.3ha（内茶臼山高原牧場 58.6ha）の用地の内 141.8ha の草地を利用して県内酪農家により飼育されている乳雌子牛（生後 3 か月齢前後）のうち、令和 6 年度は、将来性のある 554 頭を購入し、夏期を中心に昼夜放牧を取り入れた 6 か月及び 21 か月の集団育成を行い、健全な基礎牛として県域団体を通じ県内酪農家等に譲渡している。

段戸山牧場では、開場以来令和 6 年度末で 22,838 頭の育成牛を譲渡している。

表 1 育成実績

年度	S44～H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	計
導入	18,479	550	570	556	548	551	540	551	540	484	554	23,928
譲渡	17,103	558	565	564	510	528	539	547	536	487	521	22,838

注) 1 平成 16 年度まで 12 か月育成

注) 2 平成 17 年度より 6 か月・10 か月、18 年度より 6 か月・10 か月・21 か月（初妊牛）

注) 3 平成 23 年度より 6 か月・21 か月（初妊牛）*一部 5 か月、7 か月、8 か月育成譲渡実績あり

1 位置及び地形

岐阜県、長野県境に近い豊田市の奥三河山間部に位置し、標高 699～921m（畜舎施設の標高 825 m）の中山間地帯で、最大傾斜度は 42 度、15 度未満は約 37%と非常に起伏の激しい急傾斜地である。

表 2 草地分級

区 分	面積(ha)	割合(%)
I 級地（傾斜度 8 度未満）	28.3	25.2
II 級地（ " 8～15 度未満）	13.9	12.4
III 級地（ " 15～25 度未満）	28.9	25.7
IV 級地（ " 25 度以上）	41.3	36.7
合 計	112.4	100.0

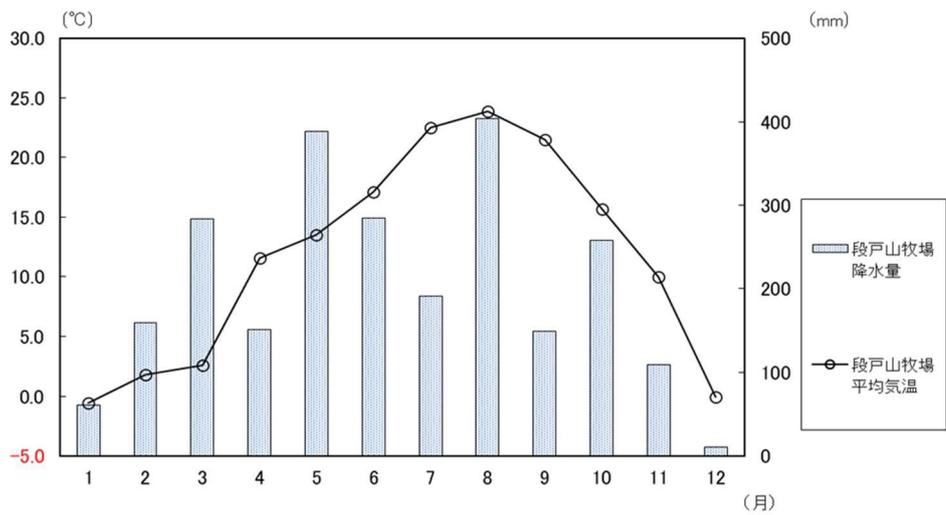
なお、茶臼山高原牧場は長野県境の標高 1,150～1,250m に位置し、傾斜は全体に比較的緩やかで、草地分級では I 級地が 27.6ha（93.9%）、II 級地が 1.8ha（6.1%）である。当牧場は夏～秋期（5 月上旬～11 月下旬）のみ利用している。

2 気象

一般に夏期は涼しく過ごしやすいが、冬期の冷え込みは厳しい。令和 6 年の降水量は 8 月が 404mm で最も多く、5 月もそれに迫る量で、年間では 2,449mm であった。総降雨日数は 139 日であった。

また、最も暑かった時期は 8 月の平均最高気温 27.7℃（最高気温 30.0℃）で、最も寒かった時期は 1 月の平均最低気温 -4.6℃（最低気温 -11.0℃）であった。年間平均気温は 11.6℃であった。

令和 6 年の段戸山牧場における年間気象状況（気温及び降水量）は、下図表のとおりである。茶臼山高原牧場では測定を行わなかった。



月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
降水量(mm)	61	159	284	152	388	285	192	404	149	258	109	11
平均最高気温(°C)	3.4	5.8	6.7	15.8	18.0	20.7	25.8	27.7	25.2	19.1	12.5	3.3
平均気温(°C)	-0.6	1.8	2.6	11.6	13.5	17.1	22.5	23.9	21.5	15.7	10.0	-0.1
平均最低気温(°C)	-4.6	-2.1	-1.6	7.3	9.0	13.6	19.3	20.0	17.8	12.3	7.6	-3.6



图1 段戸山牧場内略图

茶臼山高原牧場 整備計画図

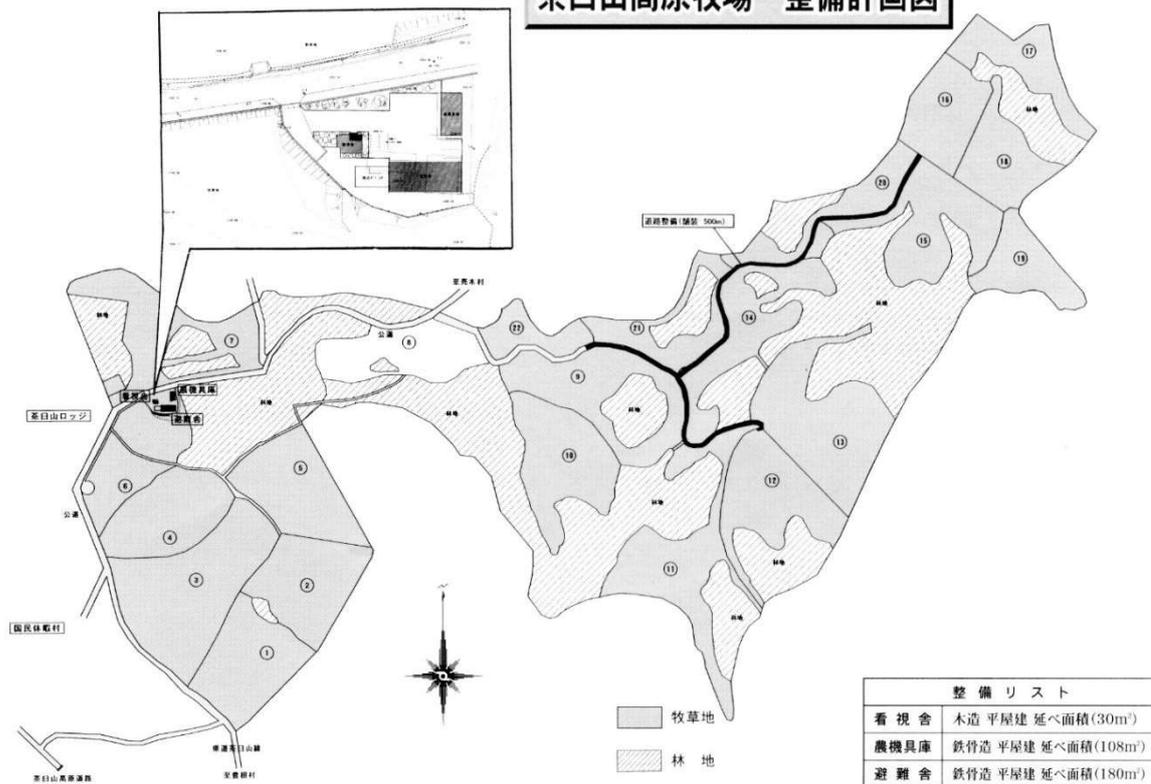


図2 茶臼山高原牧場内略図

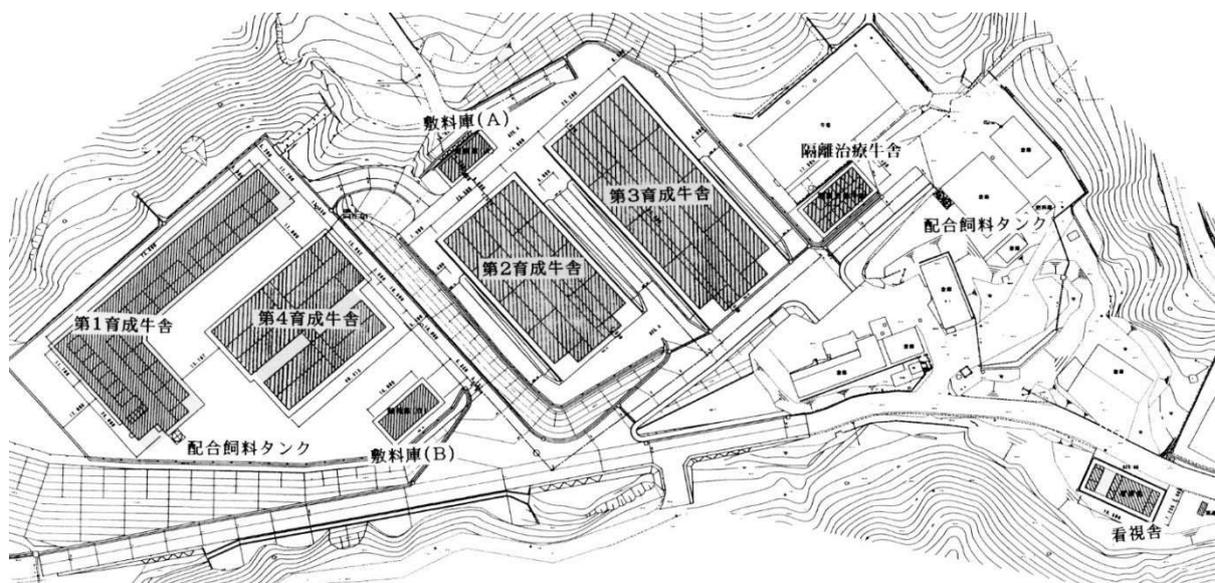


図3 畜舎施設配置図

育 成 課

1 概要

令和6年度は、5月、7月、9月、11月、1月、3月の6期に分け約2～5か月齢の子牛計554頭を購入した。第1育成牛舎で2～3か月間哺育育成し、第2・第3育成牛舎で4～7か月間（馴致及び放牧）、第4育成牛舎において繁殖管理を行っている。

なお、育成方式は平成23年度以降、6か月（令和6年度、一部7か月育成あり）及び21か月（初妊牛）の2タイプとなっている。

測尺は導入時と4～5か月後に実施するとともに、21か月育成牛については評価約1か月前に実施している。また、育成期間満了の約1か月前には評価会を開催し、譲渡手続きを行っている（育成課年間主要作業は、表1のとおり）。

畜舎構造は、第1育成牛舎は5頭入り哺乳房14房と10頭入り8房のフリーバーン式の離乳房、第2、第3育成牛舎は20頭入り8房のフリーバーン式、第4育成牛舎は20頭入り4房のフリーバーン式となっている。また、病畜の収容施設として隔離牛舎があり、単房形式となっている。

現在、放牧は34牧区（77.6ha）で、4月上旬から10月までの約7か月間の昼夜輪換放牧を実施している。また、例年茶臼山高原牧場（21牧区、29.4ha）を利用し当场から25頭前後の育成牛を移動させ、5月中旬から10月末頃までの間、昼夜輪換放牧を実施したが、令和4～6年度については飼養管理を担当する人員が確保できなかったため、放牧は実施しなかった。

家畜管理は変則勤務体制を取り、土・日曜日、祝祭日の管理は3人編成で、週休2日制を確保している。

表1 育成課年間主要作業

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
5月牛	調査	導入 測尺	除角			測尺	評価	6か月 退牧				
7月牛			調査	導入 測尺	除角			測尺	評価	6か月 退牧		
9月牛					調査	導入 測尺	除角			測尺	評価	6か月 退牧
11月牛	評価	6か月 退牧					調査	導入 測尺	除角			測尺
1月牛		測尺	評価	6か月 退牧					調査	導入 測尺	除角	
3月牛	除角			測尺	評価	6か月 退牧					調査	導入 測尺
放 牧												
サイレージ 給 与												

2 飼養管理実績

(1) 素牛導入状況

素牛は県酪農農協を通じて県内の酪農家から導入している。令和6年度の導入農家は、図1に示すとおり県内全域に及ぶが、田原市の224頭（全体の40%）を筆頭に新城市、豊川市等からの導入が多かった。

また、導入時の月齢は集団育成の立場から差が少ないことが望まれるが、月齢差対応として各導入期とも入牧後の群編成、疾病予防対策には細心の注意を払っている。

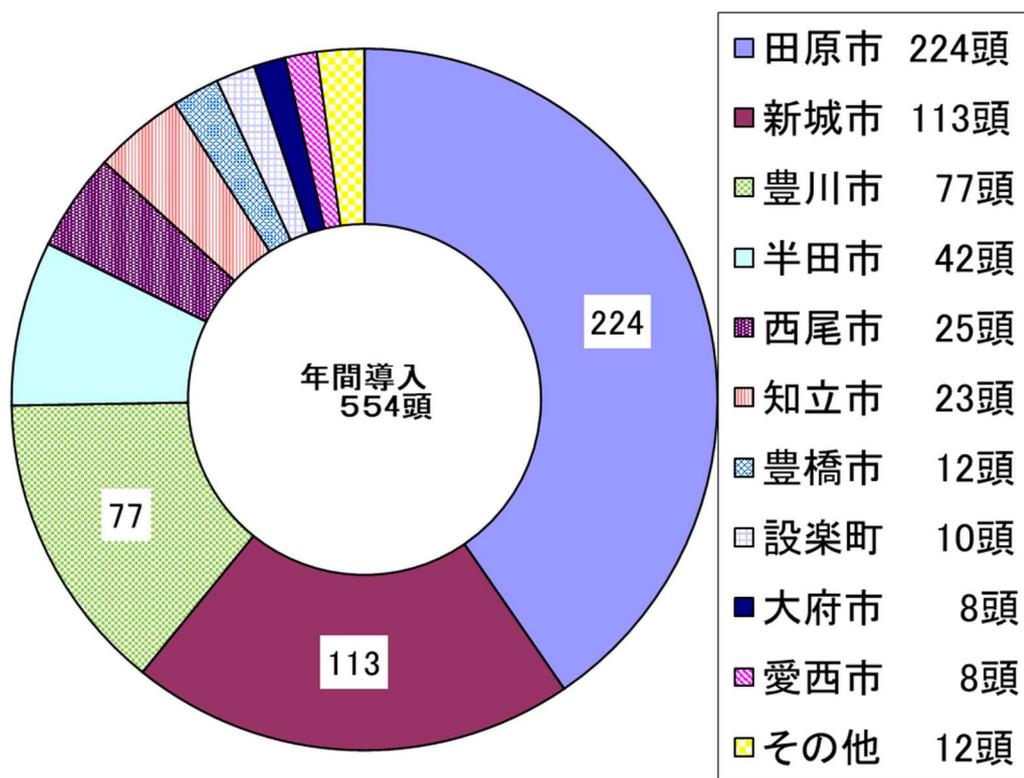


図1 令和6年度 市町別導入牛の頭数

(2) 飼料給与体系及び発育成績

当場の育成計画は導入期ごとに異なり、また飼育環境も急傾斜地放牧、冬の寒さ（最低 -11.0°C ）等の厳しい条件下にあることから発育成績にバラツキがみられるが、21か月育成牛については繁殖開始の発育目標を平均月齢13か月、体高125cm以上、体重350kgにおき発育ステージごとの飼料給与方法に工夫をこらしている。飼料給与の基本は表2のとおりであり、粗飼料についてはロールバールサイレージ、購入乾草等を給与している。

放牧中は配合飼料を1日1頭当たり2.0~3.0kg、草の状態を見ながら給与している。

本年度の導入時及び譲渡時の発育状況は表3及び表4のとおりである。

表2 育成牛1頭当たりの給与表

単位：kg

飼料		日齢	61~70	71~80	81~90	91~100	101~120	121~150	151~180	181~210	211~240	241~270	271~300	301~330	331~365	366~395	396~415	計	
哺乳	代用乳	日量	0.5	0.5															10
		延数量	5	5															
	温湯（リットル）		4	4															
	哺乳回数		2	2															
畜舎	人工乳	日量	1.3	1.3	1.8	2.3	2.5												117
		延数量	13	13	18	23	50												
	育成前期	日量						2.5	2.8	2.8	3.0	3.0							423
		延数量						75	84	84	90	90							
	育成後期	日量											3.0	3.0	3.0	3.0	3.0		435
		延数量											90	90	105	90	60		
	乾草	日量	1.3	1.8	2.2	2.7	3.0	3.5	3.5	3.5	2.0								500
		延数量	13	18	22	27	60	105	105	90	60								
	サイレージ	日量								4	10	20	22	24	24	26	28		4,580
		延数量								120	300	600	660	720	840	780	560		
放牧	牧草	日量						18	20	23	25	28	30	30	33	36		8,060	
		延数量						540	600	690	750	840	900	1,050	990	1,700			
	育成後期	日量						2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5		663	
		延数量						75	75	75	75	75	75	88	75	50			

表3 導入牛の発育状況

導入時期	頭数 (頭)	日齢 (日)	体高 (cm)	体重 (kg)
令和6年 5月	77	94.9	99.1	122.4
6年 7月	97	95.8	99.1	118.7
6年 9月	102	84.8	94.9	103.6
6年 11月	90	95.3	99.8	116.2
7年 1月	74	117.3	103.3	138.2
7年 2月	23	121.1	106.0	149.7
7年 3月	91	118.5	103.7	138.5
合計（平均）	554	(104.0)	(100.8)	(126.8)

表4 譲渡牛の発育状況

譲渡時期	譲渡牛の内訳					
	6か月育成 (一部、5,7,8か月含む)			21か月育成（初妊牛）		
	頭数 (頭)	体高 (cm)	体重 (kg)	頭数 (頭)	体高 (cm)	体重 (kg)
第1回	64	116.5	236.3	23	140.9	517.6
第2回	65	120.4	272.1	19	139.7	533.7
第3回	56	120.4	271.4	21	141.4	581.9
第4回	56	119.5	266.4	17	139.8	602.5
第5回	77	116.9	224.8	19	141.9	555.7
第6回	76	117.4	243.3	28	141.0	564.7
合計	394	—	—	127	—	—

(3) 放牧実績

4月から10月まで、7～8か月齢の育成牛に3週間程度の馴致を行った後、昼夜輪換放牧を実施した。

放牧期間中の育成管理については、補助飼料給与時及び放牧地移動時に個体観察を行い、特に、放牧初期の発育遅延、季節的草量不足、小型ピロプラズマ病発症等の発見に努め、必要に応じ畜舎収容、牧区変更を行い、また、定期的に血液検査を実施した。

3 衛生対策

当場での主要疾病は、導入初期の発熱、肺炎及び下痢であり、これらは子牛の発育に大きく影響している。

このための衛生対策として、導入後に肺炎予防として6種混合不活化ワクチン（商品名：キャトルウィン6）を投与し、適宜、牛呼吸器複合病治療薬（商品名：チルミコシン300）や下痢症予防として抗コクシジウム剤（商品名：ダイメトン散）の経口投与を行っている。また、必要に応じて繁殖前に5種混合不活化ワクチン（商品名：ボビバック5）を接種している。放牧実施時には、ピロプラズマ病対策として2週間間隔で外部寄生虫駆除剤（商品名：フルメトール）塗布を実施している。

なお、全国的にヨーネ病及び牛ウイルス性下痢粘膜病の清浄化対策が進められている中で、当場でも防疫対策要領を設けて定期的な検査を実施している。

4 初妊牛育成及び繁殖成績

当場では初妊牛育成のため、人工授精及び受精卵移植を実施している。令和6年度の成績は表5及び表6のとおりである。

なお、平成23年6月より発情発見器（商品名：牛歩）を導入し、発情把握、適期授精に効果を発揮している。

表5 人工授精実績（令和7年3月31日までの実施分）

授 精 本 数(a)	195 本
授 精 実 頭 数(b)	173 頭
受 胎 頭 数(c)	93 頭
受 胎 率(d)	60.7%
1 頭当たり精液使用本数 (e)	1.13 本

注) $d = c / a \times 100$ 、 $e = a / b$

表6 受精卵移植実績

移植延頭数(a)	移植実頭数(b)	受胎頭数(c)	不明頭数	受胎率(d) (妊娠率)
59 頭	42 頭	27 頭	8 頭	52.9%

注) $d = c / b \times 100$

草 地 課

1 概要

(1) 草地の概況

本牧場の草地は、大半が平成11～17年度まで実施された都道府県営公共牧場整備事業により草地造成・整備された（造成：4ha、整備：11.37ha）。また現在、平成15年度から続く広域営農団地農道整備事業・奥三河2期地区で発生する残土を引き受け、面積約3haの草地造成（埋立客土による段差・斜面解消）を行ってきた。

現状、令和6年度に牧草栽培を行った採草地の合計面積は34.5haであり、これは県内トップレベルの牧草栽培面積となっている。しかし、本牧場の草地は、傾斜地である上、花崗岩が風化して出来上がった真砂土（山砂）主体で構成されているため、肥料成分（窒素、カルシウムなど）が流亡しやすく、牧草栽培には大変難しい圃場条件である。

栽培している牧草の草種は、秋播きのオーチャードグラス、イタリアンライグラスなど（イネ科永年牧草）を主体に栽培・収穫している。令和2年度から、これらに加えてチモシー、ライムギ（令和6年度は実績なし）やスーダングラスの栽培も取り組んでいる。刈取り後の牧草は、反転、集草、梱包、ラッピングの後、ロールバールサイレージ（直径125cm×高さ100cm）に調製している。

ロールバールサイレージの生産量は、平成24及び25年度に1,000個を下回るまで減少したが、平成26年度からの増収に向けた施策により平成28年度には1,300個前後まで回復した。しかし、その後再び減少傾向となりここ数年は1,000個程度の収量となっている。減産の要因は①施肥量（窒素分）不足、②pH低下による窒素肥料の肥効低減、③未熟堆肥の大量施用による牧草生育障害、④雑草の増殖、⑤有害獣（シカ・イノシシ）による草地荒廃であり、これらへの対策として令和4及び5年度に除草（ギンギン等）、有害獣駆除などを実施した。しかし、令和4年度は生産量957個と1,000個を下回り、令和5年度には生産量625個（対前年比65.3%）と前年度からさらに落ち込んだ。そのため、令和6年度に向けて主力圃場であるA、B、C及び33圃場に対する施肥内容の見直しや草地整備の徹底化を図り、令和6年度は生産量1,017個に回復した。

一方、放牧地も、ギンギン、チカラシバ、ススキ、野バラなど雑草・雑木が繁茂し、牧養力が低下している。放牧地は傾斜が強い場所が多いため、草地更新（除草・播種・施肥）が難しい状況ではあるが、トラクターで作業可能な牧区については、堆肥散布や播種を行っている。

堆肥は、ホイールローダーによる定期的な切り返しを行い、90日以上堆肥化処理した牛ふん堆肥を用いている。堆肥中の肥料分が牧草に有効利用されるようにするため、秋期を中心とした堆肥散布体系を実施している。

また、堆肥の品質向上対策及び広域流通対策を令和7年度も継続的に実施していく。堆肥の品質向上対策は、直営工事で設置した堆肥盤（360㎡）を活用し、堆肥化処理期間を長くすることで、高品質な堆肥の生産を行っている。令和6年度の生産流通対策は、茶臼山高原牧場において堆肥盤ピット（約30㎡）を活用し、112tの堆肥を運搬・散布した。さらに、みよし市（果樹）及び設楽町（水稻）の耕種農家等へ合計68tの堆肥販売を行った。

冬期の作業としては、採草地・牧道の補修、陽当たり改善のための間伐作業、除雪作業などを行った。さら



図2 ロールベールサイレージの収穫・調製の流れ

表1 令和6年度牧草生産量

採草地	面積 (ha)	1			2			3			4		
		ロール数 (個)	製品重 ¹⁾ (t)	生草重 ²⁾ (t)									
A東	3.5	-	-	-	125	<u>52.5</u>	<u>105</u>	63	31.5	63	188	84	168
A南	7.5	90	45	90	69	34.5	69	44	22	44	203	101.5	203
A北	4.5	86	43	86	81	40.5	81	44	22	44	211	105.5	211
B南	2.0	10	5	10	16	8	16	13	6.5	13	39	19.5	39
B北	2.5	17	8.5	17	26	13	26	14	7	14	57	28.5	57
C	3.0	35	17.5	35	37	18.5	37	23	11.5	23	95	47.5	95
18	1.3	10	5	10	19	<u>8.0</u>	<u>16.0</u>	7	3.5	7	36	16.5	33.0
31手前	0.9	7	3.5	7	12	<u>5.0</u>	<u>10.1</u>	16	8	16	35	16.5	33.1
31奥	0.9	7	3.5	7	4	<u>1.7</u>	<u>3.4</u>	8	4	8	19	9.2	18.4
33上	2.2	15	7.5	15	22	<u>9.2</u>	<u>18.5</u>	7	3.5	7	44	20.2	40.5
33下		7	3.5	7	12	<u>5.0</u>	<u>10.1</u>	4	2	4	23	10.5	21.1
37	2.0	26	13	26	18	<u>7.6</u>	<u>15.1</u>	0	0	0	44	20.6	41.1
D奥	1.3	11	5.5	11	6	3	6	6	3	6	23	11.5	23
D前	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
小計	33.0	321	160.5	321	447	206.5	413	249	124.5	249	1,017	491.5	983

注1) 製品重は、ロールベール1個あたり500 kgとして算出した推定量。

2) 生草重は、ロールベールサイレージ水分率50%、生草の水分含量を75%として算出した推定量。

3) 2番草の太字下線部付きの数値は、ロールベール1個あたり420 kgとして算出した推定量。

表2 過去10年間の牧草生産量

採草地	面積 (ha)	牧草収穫量(ロール個数)												単収		摘 要	
		H23	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R5		R6
A東	3.5	131	133	166	135	132	136	163	169	125	137	141	75	188	2.1t/10a	5.4t/10a	H26～27草地更新+鶏ふん H28～草地更新 R4苦土石灰
A南	7.5	191	178	219	231	241	187	214	175	204	230	187	130	203	1.7t/10a	2.7t/10a	H27～R3苦土石灰
A北	4.5	223	166	226	222	232	228	264	236	239	249	186	135	211	3.0t/10a	4.7t/10a	H26～R3苦土石灰
B南	2.0	67	58	56	72	71	50	55	51	43	50	46	21	39	1.1t/10a	2.0t/10a	H27～R3苦土石灰
B北	2.5	95	86	89	103	114	77	82	74	66	69	69	37	57	1.5t/10a	2.3t/10a	H27～R3苦土石灰
C	3.0	57	68	68	78	121	86	81	86	94	99	89	73	95	2.4t/10a	3.2t/10a	H27～R3苦土石灰
14	0.9	19	14	14	20	30	20	17	9	11	-	-	-	-	-	-	R3～放牧地へと転換
18	1.3	38	42	47	53	55	42	55	51	42	43	38	22	36	1.7t/10a	2.8t/10a	H27草地更新(約1/2) H28～R3苦土石灰
31	1.8	52	65	68	72	95	58	72	54	50	52	36	40	54	2.2t/10a	3.0t/10a	H27～R3苦土石灰
33	2.2	79	71	70	93	122	96	90	90	71	87	81	39	67	1.8t/10a	3.0t/10a	H27～R3苦土石灰
37	2.0	44	43	34	29	66	56	44	27	36	58	55	40	44	2.0t/10a	2.2t/10a	H27～R3苦土石灰
7・10	1.5	37	23	14	38	49	36	26	13	24	15	12	2	-	0.1t/10a	-	R5 1番草収穫後 放牧地へと転換
D奥	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	17	11	23	0.8t/10a	1.8t/10a	R3より採草開始
D前	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	R4.12造成完了 R6.9 イタリアライグラス播種
計	33.1	1,033	945	1,070	1,146	1,328	1,072	1,163	1,035	1,005	1,094	957	625	1,017	2.9 t/10a	3.1 t/10a	

平成30年度からは新しいロールペーラによって高密度になっているため、ロール数が導入前に比べ少なくなっている。

3 草地の管理状況

(1) 土壌診断結果

施肥設計の基礎データとなる全採草地の土壌診断（3番草収穫直後）の結果を表3に示す。全体的にpHが低い傾向にあるが、堆肥を多量に散布しているA東及びD前草地ではpHが高い傾向にある。

また、リン酸については概ね必要を満たしていることがわかったが、今後とも高度化成肥料の供給が必要と考えられる。しかし、供給が過剰になると、石灰及び苦土とのバランスが崩れ、石灰や苦土の欠乏症を引き起こす可能性があるため注意が必要である。また、牛ふん堆肥はカリ濃度が高く、石灰：苦土：カリのバランスを崩しやすい傾向があるため、モニタリングを継続していかなければならない（理想の比率…Ca：Mg：K=5：2：1）。

表3 令和6年度土壌診断結果

採草地	土性	pH	EC (mS/cm)	有効態 りん酸 (mg)	CEC (陽イオン交換能) (me)	交換性石灰 (mg)	交換性苦土 (mg)	交換性カリ (mg)	塩基 飽和度 (%)	腐植 (%)
A南	砂壤土	5.0	0.15	24.5	9.3	176.0	28.0	11.0	85.2	3.8
A北	砂壤土	5.1	0.14	24.6	9.6	187.0	38.0	11.0	91.8	3.5
B南	砂壤土	5.1	0.09	19.8	8.2	140.0	28.0	9.0	80.4	2.8
B北	砂壤土	5.1	0.12	22.3	8.0	139.0	27.0	7.0	80.8	3.6
C	壤土	4.7	0.16	19.3	8.3	149.0	22.0	10.0	79.9	3.5
18	壤土	5.2	0.15	34.8	12.3	224.0	38.0	15.0	83.1	5.2
31手前	壤土	4.9	0.09	20.3	8.4	121.0	26.0	10.0	69.5	3.8
31奥	埴壤土	4.6	0.10	21.3	6.9	81.0	21.0	10.0	60.2	2.4
33上	壤土	5.0	0.14	26.5	12.1	179.0	32.0	17.0	69.0	5.8
33下	壤土	4.9	0.08	14.5	6.4	95.0	18.0	4.0	68.4	3.3
37	壤土	4.9	0.10	24.0	12.3	128.0	28.0	16.0	51.3	5.6
D奥	壤土	5.0	0.07	28.1	10.2	84.0	15.0	15.0	39.9	9.1
D前	壤土	6.8	0.39	96.5	18.7	723.0	136.0	127.0	188.9	2.8
平均		5.2	0.14	32.5	10.1	198.6	38.0	21.6	86.3	4.1
目標値		6.4～7.0	0.1～0.3	30～50	10～20	267.3～310.5	74.0～85.5	68.9～79.8	70～90	3～5

(2) 施肥量

過去10年間の施肥量は表4のとおりで、土壌診断結果に基づき、不足する養分を堆肥と化成肥料で補うように毎年施肥設計をし、施肥を行っている（令和6年度は表5のとおり）。

なお、平成26年以降、堆肥の草地表層への継続施用によって、堆肥層が形成され堆肥分解の鈍化による成分供給の遅れ、堆肥分解によっておこる窒素飢餓の影響で牧草収量が低下したため、令和2年度より、高度化成肥料の利用によって土壌中成分の充実を図っているが、令和4及び5年度は肥料価格高騰により十分に補えなかった。

表4 過去10年間の施肥量

		H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6 ³⁾
施肥量 (窒素) ¹⁾ kg/10a	秋(前年)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	春	6.0	8.5	8	8	8.1	8.4	4.7	5.2	9.3	5.3	16.6
	夏(2番草)	10.0	7.5	8.5	8.5	8.9	8.4	7.2	7.9	5.3	3.0	6.8
	夏(3番草)	5.0	6.5	6.5	5.8	6.5	7.5	7.1	7.8	3.6	2.1	4.6
	計	21.0	22.5	23.0	22.3	23.5	24.3	19.0	20.9	18.2	10.3	28.0
施肥量 ²⁾ (苦土石灰) 秋(前年) kg/10a	50.0	40~ 80	70.0	70.0	100.0	70.0	100.0	100.0	57.1~ 100.0	0.0	0.0	

注1) R2～R6は高度化成肥料の利用により窒素のほか、リン、カルウムが同量投入されている。

2) 苦土石灰についてH26、H27、R2～R4は一部の牧草地のみに散布。

3) R6で用いた高度化成肥料は窒素、リン、カルウムの割合が春14:8:8、夏14:8:10となっている。

表5 令和6年度の施肥量

採草地名	面積 (計33ha) (ha)	堆肥施用 ¹⁾ (t/10a)	高度化成施肥量 ²⁾ (窒素分)				備考
			1番草追肥 ³⁾ (kg/10a)	2番草追肥 (kg/10a)	3番草追肥 (kg/10a)	計 (kg/10a)	
A東	3.5	7.2	21.0	0.0	5.4	26.4	スーダングラス
A南	7.5	1.8	17.5	2.8	3.7	24.0	
A北	4.5	1.4	18.0	2.9	3.7	24.6	
B南	2.0	0.0	17.8	7.0	3.4	28.3	
B北	2.5	2.7	14.2	6.2	3.7	24.1	
C	3.0	2.4	18.1	2.8	3.5	24.4	
18	1.3	1.9	14.6	6.3	3.8	24.7	
31前	0.9	2.5	16.0	6.2	3.8	26.0	チモシー
31奥	0.9	2.8	16.0	8.2	3.8	28.0	
33上	1.6	2.5	14.8	6.4	3.6	24.7	
33下	0.6	0.0	17.0	11.7	3.9	32.6	
37	2.0	4.6	14.3	6.1	1.1	21.5	チモシー
D奥	1.3	5.0	14.2	6.1	3.8	24.0	
D前	1.4	39.1	0.0	0.0	10.8	10.8	R4.12 造成完了 R6.9 イタリアライグラス播種
平均 ⁴⁾		5.3	16.0	6.1	3.5	25.6	

注 1) R5年秋からR6春までの施用量を示す（R6年度に収穫された牧草を評価するため）。

2) 高度化成肥料のN:P:K比は春（1番草）が14:8:8、夏（2、3番草）が14:8:10となっている。

3) A東はスーダングラス元肥の施用。

4) 高度化成肥料の平均値はA東及びD前を除く平均値を示す。

4 牧草（自給飼料）生産による費用対効果

(1) 自給飼料生産コスト

令和6年度に生産された自給飼料（ロールバールサイレージ）のコストは表6のとおり10,980千円となり、令和5年度から786千円さらに上昇している（人件費及び減価償却費除く）。

表6 ロールベールサイレージ生産コスト

(単位:千円)

種苗費	肥料費	除草剤費	ラップフィルム等消耗品	燃料費 ¹⁾	牧草収穫機械維持費 ²⁾	計
1,468	4,386	155	880	1,283	2,808	10,980

注 1) 年間免税軽油使用量の50%を計上。

2) 年間農業機械特定自主検査・修理代の50%を計上。

(2) 自給飼料生産による購入乾草相当額

令和6年度に自給生産されたロールベールサイレージを購入乾草として評価計算した結果を表7に示す。このデータから、ロールベールサイレージ1個あたり20千円相当と試算される。令和5年度には12,293千円と大幅に減少した(令和4年度:27,768千円)評価額が、令和6年度には20,289千円まで回復した。

表7 牧草生産効果(ロールベールサイレージ自己生産による購入乾草削減効果)

生産個数 (個)	生産量 ¹⁾ (t)	乾物量 ²⁾ (t)	乾草相当量 ³⁾ (t)	乾草購入相当額 ⁴⁾ (千円)
1,017	491.5	245.8	285.8	20,289

注1) ロールベールサイレージは0.5tと0.42tの2種を生産(それぞれ805個、212個を生産)。

2) ロールベールサイレージの水分含量は50%とする。

3) 購入乾草の乾物率は86.4%とする。

4) 購入乾草の単価は71円/kg(R6実績)とする。

(3) 購入飼料削減効果(収支バランス)

令和6年度に生産された自給飼料による購入飼料削減効果(「購入乾草相当額」-「生産コスト」)は、表8のとおり9,310千円であった。大幅に下落した令和5年度の効果(2,100千円)から回復が見られるが、令和4年度(18,878千円)には至っていない。

表8 購入乾草削減効果

(単位:千円)

生産コスト	購入乾草相当額	購入乾草削減効果
10,980	20,289	9,310

(4) 自給率

令和6年度の自給率(TDNベース)は表9のとおり27.0%、また粗飼料自給率は47.0%となり、前年を下回った昨年度の34.2%から回復した。

表9 自給率(TDNベース)試算¹⁾

飼料種	支給量 (t)	乾物率	乾物重量 (t)	TDN	TDN量 (t)	構成比率	備考
ロールベールサイレージ	491.5	50.0%	245.8	60.0%	147.5	27.0%	推定自給率
購入乾草	339.7	86.0%	292.1	57.0%	166.4	30.4%	
配合飼料	369.6	87.0%	321.6	72.4%	232.8	42.6%	
計	-	-	859.4	-	546.7	-	粗飼料自給率 ²⁾ 47.0%

注1) R5年度産飼料の残数は加算せず(在庫量が微量だったため)。

2) 放牧中の粗飼料摂取量を加味していないため、実自給率はさらに高いと推察される。

5 堆肥化処理及び利用・流通状況

(1) 堆肥化処理体系

当场から出た糞尿の堆肥化処理の流れについては、図3のとおり堆肥舎・切り返し（ホイールローダー）方式を採用している。

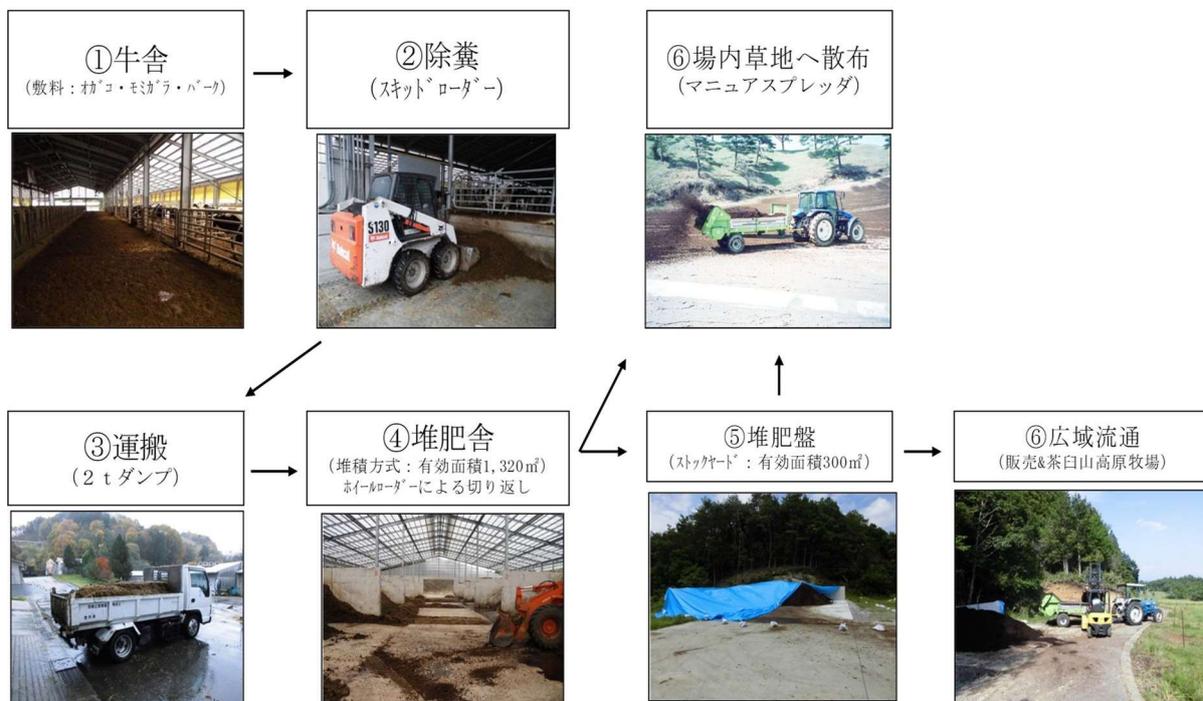


図3 堆肥化処理の流れ

(2) 堆肥の利用・流通

堆肥の利用及び流通状況について表10に示す。令和6年度の茶臼山高原牧場への堆肥散布は一昨年並みの112t、販売は昨年並みの66t、合計178tの堆肥を場外で利用・流通させることができた。

茶臼山高原牧場への散布については、平成26年度に堆肥盤ピット（図4）を設置したことにより、作業効率を向上させることができたため、短期間で散布することが可能となっている。

販売については、水稻農家（設楽町）、果樹農家（みよし市）販売を継続し、他に一部豊田市内の耕種農家等広域流通を図っている。

表10 過去5年の堆肥の利用・流通状況

利用・流通先	(単位:t)				
	R2	R3	R4	R5	R6
場内採草地等への散布	1,333	1,430	1,324	1,482	1,285
茶臼山高原牧場への散布	190	300	100	44	112
販売	92	80	88	68	66
合計	1,615	1,810	1,512	1,594	1,463



図4 茶臼山高原・堆肥盤ピット

(3) 堆肥の肥料成分

令和4年から6年度は堆肥の成分分析を行っていないが、参考値として令和3年度の分析結果を表11に示す。ホイールローダーによる切り返し方式で処理する結果、水分が高い傾向にある。また、ふん尿を混合処理していることから、カリウムが高い傾向にあるので、牧草中のカリウム濃度のモニタリングが必要である。

表11 令和3年度堆肥の肥料成分（参考）

採取年月日	サンプル名	処理期間(推定)	水分%(現物)	粗灰分%(乾物)	pH	EC mS/cm	窒素%(乾物)	リン酸%(乾物)	カリウム%(乾物)	石灰%(乾物)	苦土%(乾物)	炭素率(C/N)
R3.11.22	販売用	180日	72.4	15.3	10.2	5.4	1.6	1.6	4.1	2.9	1.0	27.2
R3.11.22	堆肥盤	180日	78.1	21.0	9.3	4.9	2.4	2.3	4.1	4.7	1.6	17.4

6 農業機械

当事業が所有している農業機械は、表12のとおりである。令和6年度はトラクター等の更新や保守整備に務めたが、大きな修理が重なり、令和5年度からは少し下がったが維持修理費は8,613千円と高額になっている（令和5年度維持修理費：9,222千円）。これらの重機の中には昭和期の導入でありながら更新が進んでいない機種もあり、計画的な更新が必要となっている。

表12 当場が所有する農業機械一覧

農業機械名	メーカー名・形式	導入年	用途	修理等実績	修理箇所	費用
トラクター	フォード7710	95PS 4WD	S60	牧草栽培・収穫(梱包等)		
トラクター	フォード5030	70PS 4WD	H6	牧草栽培・収穫(刈取り等)	修理 ステアリング等	102千円
トラクター	フォード4610	63PS 4WD	H2	牧草栽培・収穫(刈取り等)	点検	266千円
トラクター	ニューホランド4835	65PS フロントローダー付き	H9	牧草栽培・収穫(ロール積込等)	修理 フロントガラス等	619千円
トラクター	ニューホランドBRAVO 85C(TL90)	85PS 4WD	H13	牧草栽培・収穫(反転・集草)、堆肥散布等	点検、修理 燃料タンク等	755千円
トラクター	マッセーファーガソン4445-4c	86ps 4WD	H19	牛舎管理(ロールカッター)		
トラクター	ニューホランドT5.105	107ps 4WD	H28	牧草栽培・収穫(ロールベアラー)	点検、修理 ブレーキ等	506千円
トラクター	クボタGL-23	23ps 4WD	H4	牧草栽培・収穫(ラッピングマシン)		
貨物自動車	トヨタ ダイナN-BU23	2tタンク 4WD	H17	草地管理	点検、修理 左後部等	270千円
貨物自動車	いすゞエルフ	2tタンク 4WD	H3	放牧管理	点検	149千円
貨物自動車	マツダ タイタン	2tタンク 4WD	H17	牛舎管理(牛ふん運搬等)	点検、修理 カバー等	669千円
貨物自動車	トヨタ ダイナ	4WD キャブオーバー	H10	牛舎管理、茶臼山高原牧場	点検	79千円
貨物自動車	ニッサン U-CM87HH	4tトラック クレーン付き	H4	牛・敷料・農業機械運搬、玉かけ作業等	点検	157千円
ホイールローダー	日立 ZW-100	101PS バケット容量1.3m ³	R1	堆肥切り返し等	点検、修理 バケット等	1,428千円
バケットローダー	ボブキャット S510型		R4	除ふん作業等	点検、修理 アーム等	1,640千円
フォークリフト	コマツ FD15C-16	32PS	H8	牛舎管理	点検	109千円
フォークリフト	三菱 FD25TMC	60PS グリッパー付	H13	ロール運搬等	点検	124千円
フォークリフト	コマツ FD20C-15		H17	牛舎管理	点検	132千円
フォークリフト	コマツ FD25T		H20	牛舎管理、茶臼山高原牧場	点検、修理 タイヤ交換等	318千円
フォークリフト	トヨタL&F 02-8FD15	1.5t	R3	牛舎管理	点検	195千円
バックホー	IHI28J	24PS バケット容量0.07m ³	H7	草地・放牧地管理	点検、修理 燃料ポンプ等	68千円
バックホー	クボタ U-25-3A		R4	草地・放牧地管理	点検	94千円
ディスクモアー	ニューホランド 442型		H4	放牧地管理(掃除等)		
ディスクモアー	ニューホランド 442型		H7	放牧地管理(掃除等)		
ディスクモアー	KUHN GMD400		H8	放牧地管理(掃除等)		
ディスクモアー	スター MDM1750		H16	放牧地管理(掃除等)		
ディスクモアー	ピコン CM2400		H16	牧草収穫(刈り取り)	修理 ホース等	26千円
ディスクモアー	ニューホランド G&S ROTOR6		H27	牧草収穫(刈り取り)		
ジャイロヘイメーカー	スター MGH310		S62	牧草収穫(反転)		
ジャイロヘイメーカー	ピコン RC360		H14	牧草収穫(反転・集草)		
ジャイロヘイメーカー	クーン GRS25N		H17	牧草収穫(反転)		
ジャイロヘイメーカー	クーン HB360		R2	牧草収穫(反転・集草)		
ロールベアラー	ニューホランド 648E-NC		H12	牧草収穫(梱包)		
ロールベアラー	ニューホランド RB-150C	新規	R6	牧草収穫(梱包)	修理 ローラー調整等	747千円
ラッピングマシン	ニューランド NR-201		H2	牧草収穫(ラッピング)		
ラッピングマシン	ニューランド NR-301		H15	牧草収穫(ラッピング)		
ラッピングマシン	ニューランド NR-301		R2	牧草収穫(ラッピング)	修理 油圧ホース等	27千円
ロータリーハロー	ニプロ DXR2410-2L		H26	牧草栽培(耕うん)		
ディスクプラウ	スター MDP-262C-G		S63	牧草栽培(深耕)		
ディスクハロー	スター MTH2032		S62	牧草栽培(耕うん・覆土)		
カルチパッカー	タカキタ CP250		H2	牧草栽培(鎮圧)		
ブロードキャスター	タカキタ BC360		S61	牧草栽培(播種・施肥)		
ブロードキャスター	スター MBC5530		H8	牧草栽培(播種・施肥)		
ブロードキャスター	初田 HD-302R		H13	牧草栽培(播種・施肥)		
ブロードキャスター	ピコン PS505		H18	牧草栽培(播種・施肥)		
マニユアスプレッダー	スター TFC3640		H5	堆肥散布		
マニユアスプレッダー	デリカ DF-3000		S61	堆肥散布		
マニユアスプレッダー	デリカ DF-3000		S63	堆肥散布		
マニユアスプレッダー	スター TMB2530M		H13	堆肥散布		
マニユアスプレッダー	デリカ DXT-3020		R3	堆肥散布		
ブームスプレーヤー	丸山 CBM520B		S62	除草剤散布		
バキュームカー	デリカ DV1600T		H13	液肥散布		
トレーラー	フォード H181		S44	農業機械・資材運搬		
トレーラー	フォード H181		S50	農業機械・資材運搬		
トレーラー	デリカ DK-8A		S61	農業機械・資材運搬		
ロールシュレッダー	ジェミリー TR18-12		H15	ロールベアラーサイレージ細断	修理 タイヤ等	135千円
ロールシュレッダー	ジェミリー TR18-12		H30	ロールベアラーサイレージ細断		

計 8,613千円

種 鶏 場

種鶏場の概要

当場は、昭和12年4月に安城市に設立され、昭和43年4月に農業総合試験場養鶏研究所の発足に伴い系統造成部門を移管し、その後は既成系統の維持増殖に努めている。

平成17年度からは、本県特産の「名古屋コーチン（名古屋種）」種ひな等を主体として、県下のふ化場や養鶏農家に譲渡し、併せて経営安定のための技術指導を行っている。

種 鶏 課

1 改良増殖の現況

(1) 名古屋種

愛知県での名古屋種改良の歴史は古く、明治41年から本格的に着手している。当時の改良は個体選抜が主であったが、昭和26年から近親交配系を分離し、家系選抜法に切り替えた。現在、肉用と卵用があり、系統造成の経緯は次のとおりである。

系統造成の経緯

～昭和58年	在来名古屋種の系統造成・・・	NGY 1	卵用タイプ
昭和59年	大型名古屋種の増体改良・・・	NGY 2	肉用タイプ
平成3年	大型名古屋種の産肉性改良・・・	NGY 3	肉用タイプ
平成12年	卵用名古屋種の系統造成・・・	NGY 4	卵用タイプ
平成23年	卵用名古屋種の改良	・・・NGY 5	卵用タイプ
平成29年	肉用名古屋種の改良	・・・NGY 7	肉用タイプ
令和6年	卵用名古屋種の改良	・・・NGY 6	卵用タイプ

ア 肉用

名古屋種は、本来卵肉兼用種であるが、産卵成績の改良に注力したため、体型が徐々に小型なものになっていった。昭和40年代に入ると、「高級かしわ肉」として改めて脚光を浴び、県農業総合試験場は、昭和47年から10年の歳月をかけ、肉用タイプ（体重で1.5倍）を造成した。昭和59年から一層の大型化に取り組み、平成3年、正肉量でさらに25%増となる肉用タイプの作出に成功した。これらの系統は供用期間が長くなると近交退化により繁殖能力等が低下してくることから、平成16年度に岩手県で観賞用として飼育されていた個体を譲り受け交配し、平成29年新系統「NGY 7」を造成した。当場では、平成30年からNGY 7を用いた新型肉用名古屋種を譲渡している。

「NGY 7」の特徴（従来の「NGY 3」との比較）

- ・産肉性が優れている

成鶏時（250日齢）の体重 雄4.01 kg→4.44 kg

- ・丈夫で飼養環境の変化などのストレスに強く、生存率が高い

育成時（150日齢）の生存率 95.2%→98.9%

イ 卵用

名古屋種の卵は、卵黄の味が濃く、舌触りも滑らかである。卵殻の色も白玉卵や赤玉卵とも違う特徴的な「さくら色」をしているため、ブランド卵として需要が多い。平成12年には、

産卵成績や卵重などの形質に特化して改良した卵用タイプを造成し、卵用名古屋種の譲渡を開始した。平成23年には、産卵性や卵質がさらに改良され、また、卵殻表面に白斑が現れ「桜吹雪」模様となる卵の出現率が高い新系統が移管され、現在これを用いた卵用名古屋種の譲渡を行っている。

さらに、生まれたひなの雌雄を羽根の形状により容易に鑑別できるようにするため、産卵能力等に加え、容易に雌雄鑑別できる新系統の開発が平成13年から始まり、令和6年3月に新系統「NGY6」が移管された。

(2) 特殊鶏（烏骨鶏・アローカナ）

卵用鶏飼養農家の中には、自動販売機、直売所、通信販売等で、卵を販売する農家も多い。

卵の品揃えを増やす目的で烏骨鶏やアローカナ交雑種等の飼養の要望があり、このような要望に応えるため特殊鶏のひなの譲渡を行っている。

2 保有鶏の現況

当場の飼養規模を下表に示す。4つの基礎系統と種鶏生産のための増殖鶏、検定鶏及び特殊鶏がある。本県の鶏の育種改良方針は、当場の他に系統造成部門を担当する県農業総合試験場畜産研究部、行政担当の畜産課の三者で組織する愛知県鶏改良増殖会議で決定している。改良増殖会議では鶏等改良増殖計画をはじめ、系統造成、系統の維持増殖、組合せの決定、餌付け計画、検定成績の分析、その他育種に関する技術的諸問題を検討し、さらに分担の調整及び方針等を定期的に協議している。また、愛知県内だけでなく、独立行政法人家畜改良センター岡崎牧場や東海三県（岐阜県・三重県・静岡県）の試験研究機関とも交流し、育種・飼養技術等の研さんに努めている。

表1 令和6年度の飼養規模

種 類		羽 数			備 考
		雄	雌	計	
卵 用 種	原 種 鶏	90羽	360羽	450羽	名古屋種2系統
	原種候補鶏	450	1,030	1,480	〃
	増 殖 鶏	100	1,110	1,210	種鶏・検定鶏生産用
	検 定 鶏	10	200	210	種鶏・実用交雑検定用
	小 計	650	2,700	3,350	
肉 用 種	原 種 鶏	90	360	450	名古屋種2系統
	原種候補鶏	450	1,030	1,480	〃
	増 殖 鶏	130	1,300	1,430	種鶏・検定鶏生産用
	検 定 鶏	110	200	310	種鶏・実用交雑検定用
	小 計	780	2,890	3,670	
特 殊 鶏	15	150	165	烏骨鶏・アローカナ	
合 計		1,445	5,740	7,185	

3 基礎系統の能力

当場で保有している基礎系統については、受精率、孵化率、50%産卵到達日齢、産卵率、卵重、体重、卵質（卵殻強度、卵殻色、肉・血斑等）等を検定している。選抜は短期検定で独立淘汰法により行っている。

表2 基礎系統の暦年成績

系統	年度	世代	受精率 (%)	対受精卵 心化率 (%)	育成率 0~150 日齢(%)	生存率 151~280 日齢(%)	50%産卵 到達日齢 (日)	卵重 270日齢 (g)	体重 150日齢 (g)	産卵率 181~280 日齢(%)	備考		
											父×母	子雌	
NGY2	平成27	42	92.1	85.5	89.6	97.8	192.0	55.3 ± 3.7	2247 ± 199	56.4	45×330	450	
	平成28	43	84.4	81.9	89.1	94.3	209.0	55.3 ± 3.7	2241 ± 227	49.6	45×330	450	
	平成29	44	71.2	91.2	96.2	93.1	218.0	59.8 ± 3.5	2375 ± 198	47.0	45×330	450	
	平成30	45	85.0	85.3	94.8	96.9	203.0	58.2 ± 4.9	2289 ± 233	54.0	45×330	439	
	令和元	46	79.3	84.5	94.1	89.8	192.0	58.3 ± 3.6	2280 ± 220	56.9	45×330	425	
	令和2	47	81.0	84.5	91.9	94.7	213.0	59.0 ± 3.5	♂ 3077 ± 232 ♀ 2330 ± 220	51.4	45×330	454	
	令和3	48	82.8	85.5	95.9	85.5	210.0	56.9 ± 3.4	♂ 3045 ± 322 ♀ 2423 ± 210	53.7	45×330	371	
	令和4	49	77.6	77.3	98.5	95.3	199.0	d 57.6 ± 3.0	♂ 2956 ± 226 ♀ 2326 ± 222	52.9	45×280	333	
	令和5	50	82.5	84.1	98.1	91.0	192.0	58.7 ± 3.7	♂ 3280 ± 218 ♀ 2550 ± 222	53.0	45×250	450	
	令和6	51	84.0	82.7	98.6	97.3	218.0	56.9 ± 3.2	♂ 2972 ± 251 ♀ 2362 ± 259	48.2	45×290	452	
	NGY5	平成27	14	97.6	88.9	88.8	99.4	188.0	57.0 ± 3.3	1697 ± 153	81.3 ± 11.8	20×120	402
		平成28	15	93.8	90.5	98.4	98.4	185.0	57.1 ± 5.7	1726 ± 165	79.3 ± 14.4	20×120	394
平成29		16	95.3	80.9	92.2	98.7	187.0	57.2 ± 3.2	c 2289 ± 200	80.3 ± 10.7	20×120	397	
平成30		17	94.3	80.6	95.3	98.8	172.0	57.7 ± 3.8	c 2302 ± 186	80.7 ± 16.5	20×120	425	
令和元		18	96.3	85.6	96.5	97.3	169.0	56.9 ± 3.1	c 2232 ± 191	79.4 ± 17.9	20×120	366	
令和2		19	95.7	83.3	94.9	97.8	177.0	55.9 ± 3.4	1686 ± 109	82.0 ± 14.2	20×120	400	
令和3		20	97.0	84.5	91.6	99.2	191.0	56.5 ± 3.3	1675 ± 121	74.9 ± 14.5	20×120	400	
令和4		21	95.1	82.7	95.5	98.2	173.0	55.5 ± 3.1	1847 ± 140	84.0 ± 14.3	20×120	400	
令和5		22	95.1	78.4	93.8	93.8	168.0	a 55.2 ± 3.4	1824 ± 137	e 73.8 ± 17.4	20×120	400	
令和6		23	95.8	79.5	99.4	99.0	167.0	54.1 ± 2.8	c 1822 ± 142	69.2 ± 10.9	20×120	400	
NGY6	令和6	23	85.2	87.8	95.0	97.0	189.0	b 55.9 ± 4.3	1595 ± 295	70.9 ± 13.3	20×120	400	
NGY7	平成29	11	78.1	66.6	95.8	97.0	203.0	a 59.0 ± 5.1	2454 ± 252	e 49.8 ± 19.1	26×156	311	
	平成30	12	84.3	77.3	94.0	97.3	207.0	60.4 ± 5.6	2696 ± 291	51.7 ± 16.5	26×156	316	
	令和元	13	78.0	70.7	92.4	96.3	189.0	59.6 ± 4.5	d 3560 ± 474	61.4 ± 17.2	26×156	316	
	令和2	14	88.2	69.2	95.6	95.0	191.0	60.5 ± 4.0	♂ 3281 ± 362 ♀ 2417 ± 245	64.9 ± 14.6	26×156	312	
	令和3	15	92.3	86.3	96.9	93.7	211.0	59.6 ± 4.8	♂ 3491 ± 362 ♀ 2492 ± 263	50.2 ± 19.8	26×156	311	
	令和4	16	83.2	76.6	92.0	91.9	198.0	59.7 ± 4.8	♂ 3399 ± 381 ♀ 2466 ± 507	57.9 ± 15.4	26×156	312	
	令和5	17	83.2	81.3	94.1	96.4	180.0	a 56.2 ± 4.3	♂ 3246 ± 376 ♀ 2413 ± 262	e 70.4 ± 18.2	26×156	292	
	令和6	18	88.2	79.4	98.0	97.8	210.0	58.6 ± 4.4	♂ 3441 ± 380 ♀ 2181 ± 298	57.5 ± 16.5	26×156	320	

注) 生存率: NGY2 のみ 151~300日齢

a : 240日齢

b : 250日齢

c : 270日齢

d : 280日齢

e : 181~240日齢

(4) ワクチネーション

基本的なワクチネーションは次のとおりである。

0日齢	MD（注射）、FP（注射）、IB（点眼）
7日齢	NB（点眼）
21日齢	IBD（飲水） IB（飲水）
28日齢	NB（スプレー）
70日齢	NB ₂ （注射）、EDS（注射）、S3（注射）、 Reo（注射）、AEFP（穿刺）

注) MD	マレック病(マレック病ウイルス2型・七面鳥ヘルペスウイルス) ワクチン、マレック病(マレック病ウイルス1型)生ワクチン
IB	鶏伝染性気管支炎生ワクチン
FP	鶏痘生ワクチン
IBD	伝染性ファブリキウス嚢病生ワクチン
NB	ニューカッスル病・伝染性気管支炎 混合生ワクチン
NB ₂	ニューカッスル病・伝染性気管支炎 2価混合(油性アジュバント加)不 活化ワクチン
EDS	産卵低下症候群-1976(油性アジュバント加)不活化ワクチン
S3	鶏サルモネラ症(サルモネラ・エンテリティディス、ティフィム リウム、インファンティス)(油性アジュバント加)不活化ワクチン
Reo	トリレオウイルス感染症(油性アジュバント加)不活化ワクチン
AEFP	鶏脳脊髄炎・鶏痘混合生ワクチン

生 産 課

1 ふ卵

ふ卵業務は通年で実施し、場用ひな、譲渡用種ひな等をふ化している。ひなの譲渡は木曜日に行っている。

1週間のふ卵業務は次のとおりである。

日曜日	種卵消毒、整理
月曜日	〃、入卵準備
火曜日	〃、入卵
水曜日	〃、発生、鑑別、選別、マレック病及び鶏痘ワクチン接種
木曜日	〃、ひな譲渡
金曜日	〃、検卵、下卵
土曜日	〃

(1) ふ化成績

表4 令和6年度のふ化成績

入卵数	受精卵	発育中止卵	死籠卵	発生羽数			ふ化率	
	受精率			雄	雌	無鑑別	対入卵	対受精卵
327,644個	297,800個	17,392個	21,589個	260,164羽			79.4%	87.4%
	90.9%			121,489羽	119,043羽	19,632羽		

(2) 種ひな及び種卵の譲渡

表5 令和6年度の種ひな及び種卵の譲渡数

種類		羽数または個数
種ひな等	名古屋種	74,848 羽
	特殊鶏	6,402 羽
	計	81,250 羽
種卵	名古屋種	12,829 個
	特殊鶏	12,692 個
	計	25,521 個

2 検定

肉用種鶏において高い生産性を得るのに適した飼料給餌量を調査するため、令和6年11月に試験鶏の餌付けを行った。令和7年度に予定している調査区分及び調査項目は以下のとおり。

(1) 調査区分と概要

令和6年11月21日餌付けの肉用種鶏NGY7雄72羽とNGY224雌600羽を検定鶏とし、飼料給餌量により調査区を設定する。検定鶏は群飼ケージ成鶏舎に収容し、150日齢から450日齢まで次の項目を調査する。

調査項目：体重、生存率、飼料摂取量

産卵成績（初産日齢、50%産卵到達日齢、産卵率、卵重）

ふ化成績（受精率、ふ化率、性比、出荷時選別合格率、初生ひな体重）

表6 調査区分

区分	検定予定羽数		1羽あたり給餌量 (g/日)		
	雄 ¹⁾	雌	90-150日齢 (大すう飼料)	150-210日齢 (成鶏飼料)	210日齢以降 (成鶏飼料)
1区	24	200	90	130	110
2区	24	200	90	143	120
3区	24	200	90	150	125

1) 雄は若齢時は別群で飼育し、210日齢時に雌25羽に対して3羽ずつ配雄する。

3 技術指導

県が造成した鶏の系統を扱う民間孵化場を、県は重点指導ふ化場として指定し、一般養鶏家が安心して飼育できる優良なひなを安定的に生産するため、種鶏の飼養管理技術や衛生対策について、集中的指導を実施するとともに生産するひなの資質向上のため一貫した指導体制をとっている。

これらの事業は畜産課、農業総合試験場畜産研究部、農林水産事務所並びに家畜保健衛生所と連携して推進している。

4 名古屋コーチンの信頼確保対策

平成19年度に発生した名古屋コーチン肉の偽装疑惑事件への対応として、平成20年度から「名古屋コーチン及びその鶏卵肉に関する基準」に基づく誓約書の徴取及び当該ホームページでの飼養農家等の公表を行い、併せて飼養農家の立入調査を実施している。

(1) ホームページでの飼養農家等の公表（令和4年度）

10,000羽以上 16件

1,000羽以上10,000羽未満 28件

100羽以上1,000羽未満 49件

100羽未満 31件

注) 年間導入羽数(30羽以上)等から、業として飼養すると判断される方を掲載

(2) 立入調査（令和6年度）

飼養農家等 なし

5 名古屋コーチン系統保存対策

高病原性鳥インフルエンザ等の重大な伝染病の発生や自然災害、火災等により、飼養鶏が殺処分もしくは死亡した場合でも、名古屋コーチンの系統を復元することが可能な体制を構築するため、平成22年度から以下のとおり実施している。

(1) 精液の保管

原種鶏の雄の精液について、各系統の家系ごとに作成した凍結精液を畜産総合センター本場及び県農業総合試験場で保管している。

表7 凍結精液本数

	NGY3	NGY4	NGY5	NGY6	NGY7	合計
令和6年末 保管本数計	600	0	800	568	1,564	3,532

(2) 生体の保管

本対策の趣旨を理解し、生体保管に協力が得られる愛知県内農業高校、農業大学校、養鶏農家等に原種鶏の飼養を依頼している。

表8 生体保管羽数

依頼年月	依頼先	NGY5		NGY6		NGY7		
		♂	♀	♂	♀	♂	♀	
令和6年5月	県立農業大学校				262			
令和6年6月	民間養鶏場						180	
令和6年8月	名古屋市農業センター					16		
令和6年11月	民間養鶏場						180	
計		0	0	0	262	16	360	
系統保存原種鶏羽数計								638

移 転 整 備

平成 28 年 2 月、名古屋コーチンの生産者を始めとする関係者で構成されている一般社団法人名古屋コーチン協会が、名古屋コーチンの潜在的な市場ニーズを取り込んで一層の需要拡大につなげるため、愛知県に対して名古屋コーチンの生産体制の強化について要請した。

これまでの安城市にあった施設は、施設が築 40 年以上経過するなど老朽化が著しく、また、家畜伝染病などへの対策の面も含めて、生産性向上には限界があるため、小牧市へ移転のうえ施設を再整備する方針を決定した。

- 平成 29 年 3 月 移転再整備基本構想策定
- 30 年 3 月 移転整備のための用地取得及び実施設計終了
 - 移転場所：小牧市大草地内（県有地）
 - 敷地面積：約 41,000 m²
- 30 年 11 月 用地造成着工
- 令和 2 年 3 月 用地造成工事完了
- 3 年 10 月 建設工事着工
- 5 年 3 月 建設工事完了、新種鶏場開場
- 6 年 3 月 旧施設の解体実施設計終了
- 6 年 7 月 旧施設の解体工事着工（令和 7 年 7 月終了予定）



種鶏場のあゆみ

1 組織・機構

昭和	12	年	4	月	愛知県種鶏場の設立
	13	年	12	月	安城市篠目町古林の現在地に施設竣工、同時に業務を開始
	24	年	4	月	愛知県種鶏場清洲分場は養鶏試験場として独立、種鶏場は白色レグホーン（白レグ）、三河種の改良と集合検定事業を分担
	38	年	4	月	養鶏技術練習生養成制度発足
	39	年	4	月	整備拡充3か年計画着手
	41	年	3	月	拡充3か年計画により新たに用地7,246.2㎡の確保と、建物16棟（3,687.7㎡）が完成し飼養規模も従前の3,700羽から10,100羽に拡大
	43	年	4	月	愛知県農業総合試験場の発足に伴い、同養鶏研究所へ系統造成部門を移管
	45	年	4	月	愛知県種鶏センターと改称
	45	年	4	月	第2次整備拡充3か年計画着手
	45	年	4	月	機構の一部改正により指導科を設置
	47	年	3	月	第2次3か年計画により、種鶏舎、候補鶏舎等11棟（延3,565㎡）を改築
	56	年	3	月	新本館建築 539.68㎡
	56	年	6	月	本館落成式
	56	年	12	月	貯卵庫建設40.28㎡ 旧本館跡地整備
	59	年	1	月	飼料倉庫改築 84.00㎡
	59	年	12	月	現場詰所改築 92.56㎡
	62	年	11	月	創立50周年記念式典及び記念誌「50年の歩み」発行
平成	2	年	9	月	ハウス式自動攪拌鶏糞乾燥施設（320㎡）設置
	3	年	4	月	機構改革により、愛知県畜産総合センターが発足し、同センター種鶏場と改称併せて庶務課を廃止し、技術科、指導科は各々種鶏課、生産課となる
	4	年	2	月	原種鶏雄鶏舎（453.2㎡）新築
	6	年	9	月	乾燥鶏糞自動袋詰施設（46.3㎡）設置
	9	年	3	月	鶏舎内部改造（群飼ケージ化）1棟（98.2㎡）及び育すう舎内部改造（温湯育すう器）
	17	年	11	月	外来車両消毒用装置設置
	18	年			ふ卵舎警報通報システム整備
	28	年	12	月	鶏糞乾燥場 鶏糞攪拌機更新
令和	5	年	3	月	小牧市大字大草字年上坂に新施設竣工、開場
	5	年	4	月	新施設にて業務開始（1年間のみ安城市の施設との2場体制）
	6	年	3	月	旧施設（安城市）を閉場

2 育種・改良

昭和 19 年	中央家禽研究所より系統導入。当场鶏との交雑、累進交配による優良個体の選出。
23 年	表型能力と血統構成との相互関係を究明、A、B、C、Dの4鶏群に分類。
24 年 10 月	愛知県産卵能力集合検定でわが国最初の365卵鶏1羽と10羽1群平均325.3個産卵の記録を樹立。
25 年	前記4鶏群についてfull-sib検定を実施、家系選抜を採用。
28 年	A、B、C、D系各々について系統繁殖により系統の確立、各系統の能力向上と特徴づけを行う。
29 年	各系統の遺伝子のホモ性を高める。
30 年	近親交配による因子型と表現型について調査。
30 年 10 月	愛知県産卵能力集合検定で365卵鶏5羽を記録。
34 年	近交系間交雑によるヘテロシス育種を実施。
35 年	過去11年に亘る育種業務によりA系2家系、B系3家系計7家系の総当たり交配による家系選抜。
37 年	家系選抜によりA1、A3、A4、B2の4家系を選出、同系交配と家系間の総当たり交配を実施。
37 年 10 月	愛知県産卵能力集合検定(350日検定となる)で無休産卵鶏9羽と10羽1群平均341.3個の記録を樹立。
38 年	A1をA系、A3をB系、A4をC系、B2をD系と命名し同系交配と総当たり交配を実施。
38 年 10 月	愛知県産卵能力集合検定で無休産卵鶏9羽を記録(うち名古屋種1羽)。
39 年 3 月	米国より白レグ2系統(ホースゲート農場)、ロードアイランドレッド種(ロード)1系統(パーメンター農場)、ニューハンプシャー種1系統(ハバード農場)計4系統(各200羽計800羽)を導入。閉鎖群育種による選抜を開始。同時に手持ちA、B、C、D系との相性調査を実施。
39 年 5 月	外国鶏コマーシャルを素材として、小軀大卵系統の造成に着手。
39 年 10 月	愛知県産卵能力集合検定で無休産卵鶏20羽を記録。
40 年	二元交雑10組合せ、三元交雑4組合せを実施。A、B系は相反反復選抜法を採用。
40 年 10 月	愛知県産卵能力集合検定で無休産卵鶏9羽を記録。
41 年 4 月	40年クロス検定成績の結果A、B、E、F、H間で四元交雑12組合せ、三元交雑14組合せ、二元交雑7組合せを実施し、わが国初の白レグ四元交雑による国産実用鶏「愛知ライン」を作出。
42 年	米国パークス農場より白レグ2系統並びに農林省熊本種畜牧場より白レグ1系統を導入。何れも農業総合試験場養鶏研究所へ管理替え。白レグ、ロードの相性調査を実施。

42	年	9	月	開場以来育種を続けてきた三河種は機構改革による業務分担の変更により農業総合試験場養鶏研究所へ管理替えとなる。	
45	年			愛知ラインの卵重改良のため昭和39年より着手した大卵系統との交雑調査を実施。	
46	年			農林省岡崎種畜牧場より白レグ2系統（アンソニー、ブレンダー）を導入、E系の分離選抜により大卵鶏E群の選抜調査を始める。	
47	年			農業総合試験場養鶏研究所で造成された大卵系統I系の系統移管と同時に卵重系愛知ラインG-700を作出。	
51	年			うまい”かしわ”作りを目的とした名古屋種の譲渡を開始	
52	年			農業総合試験場養鶏研究所における交雑試験成績の反復調査の結果G-700より更に早熟、多産、斉一性に優れた新たな組合せを改良型愛知ラインとして払下を開始。	
53	年			農業総合試験場養鶏研究所で造成された早熟性系統、L系との交雑試験成績の結果、早熟、高産卵、超多産鶏コマーシャルの作出。	
56	年			上記コマーシャルを、「愛知ラインL-80」と命名し、普及をはかると同時に養鶏研究所よりL系及び名古屋種（NGY1）の系統移管。	
59	年	3	月	農業総合試験場養鶏研究所で造成された大型名古屋種（NGY2）を同研究所より系統移管。	
59	年			新型肉用名古屋種の譲渡を開始。	
61	年			農業総合試験場養鶏研究所で造成されたR及びKの系統移管。	
62	年	2	月	上記系統（R×K）を利用して卵殻強度等を改良したコマーシャル鶏を「愛知ラインスーパーK87」と命名し、普及。	
平成	3	年	4	月	農業総合試験場養鶏研究所で造成された大型名古屋種（NGY3）を同研究所より系統移管。
	4	年	6	月	農業総合試験場養鶏研究所で造成された強卵殻系統U系の系統移管。
	4	年	10	月	上記U系を利用して、後半の卵殻強度に改良を加えたコマーシャル鶏を「愛知ラインスーパーU90」と命名し、6代目の新愛知ラインとして普及を開始。
	7	年	5	月	三河種の普及のため農業総合試験場養鶏研究所より系統移管。
	7	年	6	月	肉用三河種の開発のためWR×MK、MK×WRの肥育調査実施。
	8	年	7	月	特産鶏「肉用三河種」が農業総合試験場養鶏研究所で開発。
	9	年	2	月	農業総合試験場養鶏研究所で造成された赤玉鶏Y及びZの系統移管。
	9	年	2	月	特殊鶏（烏骨鶏、アローカナ）生産・譲渡のため農業総合試験場養鶏研究所より系統移管。
	9	年	3	月	肉用三河種を「三河地どり」と命名。
	10	年	4	月	特殊鶏（烏骨鶏、アローカナ交雑種）及び名古屋種の中ひなの譲渡開始。
	12	年	2	月	卵用名古屋種の譲渡を開始。
	13	年	2	月	農業総合試験場養鶏研究所で造成された卵用名古屋種（NGY4）を同研究所より系統移管。

- 17 年 4 月 愛知ラインの維持・増殖を廃止し、名古屋種に特化。
- 20 年 4 月 「名古屋コーチン及びその鶏卵肉に関する基準」施行。
- 23 年 3 月 農業総合試験場畜産研究部家きんグループで造成された卵用名古屋種（NGY5）を同グループより系統移管。
- 25 年 4 月 新型卵用名古屋種（実用鶏）の譲渡を開始。
- 29 年 2 月 農業総合試験場畜産研究部養鶏研究室で造成された肉用名古屋種（NGY7）を同研究室より系統移管。
- 30 年 11 月 新型肉用名古屋種（実用鶏）の譲渡を開始。
- 令和 6 年 3 月 農業総合試験場畜産研究部養鶏研究室で造成された卵用名古屋種（NGY6）を同研究室より系統移管。

V 業績発表等

業務の成果や新知見等について、以下のとおり発表した。

発表の名称	発表場所	発表日	発表題目	発表者
愛知県畜産技術業績発表会	愛知県自治センター	令和6年 12月20日	畜産総合センターにおける骨格粗大症(仮称)の発生報告	技術部人工妊娠課 久保卓司

令和6年度 畜産総合センター業務報告書

愛知県畜産総合センター

〒444-0006

愛知県岡崎市丸山町字亀山9-1

TEL 0564-21-0201

FAX 0564-22-1857